

葛飾区立図書館所蔵

葛飾コレクション図録

葛飾区立中央図書館開館一周年記念

凡例

1. 本図録は、葛飾区立中央図書館開館一周年記念の一環として、また国民読書年の記念行事の一つとして、葛飾区立図書館で所蔵している貴重な資料、ユニークな資料を広く紹介する目的で刊行するものです。
2. 葛飾に関する主要な地域資料を中心として、葛飾ゆかりの著名人の自筆原稿・原画および色紙もあわせて収録しました。
3. 自筆原稿・原画は、主として、2010年10～12月に「葛飾区立図書館所蔵資料展」を開催するにあたり、葛飾ゆかりの作家の方々からご寄贈いただいた資料です。
4. 本図録の作成にあたっては、多くの機関や個人の方からご協力ご助力を賜りました。巻末に明記した協力者・協力機関にくわえて、ご支援を賜ったすべての方々に感謝の意を表します。
5. 刊行に際して、著作権者に掲載許可の連絡がどうしても取れないケースがありました。この件につきましてお心当たりのある方がございましたら、発行者までご連絡いただきますようお願い致します。

表紙：『武蔵國全圖』、『明治前期測量2万分1フランス式彩色地図』、『葛飾区詳細図』、栗本薫『ヤヌスの戦い』、栗本薫「伊集院大介シリーズ創作ノート」、栗本薫『滅びの風』（本図録未掲載）、早乙女勝元「英国ブラッドフォード大学での講演録『歴史の記憶』から和解と平和へー東京大空襲を語りついで」、松谷みよ子『たにし長者』、の各資料より（以上、本図録の掲載順。書誌詳細は本文参照）。

ごあいさつ

葛飾区立中央図書館はこのたび、開館一周年記念の一環として、また国民読書年の記念行事の一つとして、『葛飾コレクション図録』を刊行する運びとなりました。また、昨年 2010 年 10～12 月には、本図録所収の資料展示を中心とする「葛飾区立図書館所蔵資料展」を開催いたしました。このような記念事業を行うことができましたのも、ひとえに区民の皆様をはじめ利用者の方々の日頃のご理解とご協力の賜物と、深く感謝の意を表する次第であります。

この『葛飾コレクション図録』は、葛飾区立図書館全 11 館で所蔵している貴重な資料やユニークな資料を広く知っていただきたいという目的で刊行するに至りました。現在、電子書籍が急速な勢いで普及しつつあるなど、本を取り巻く時代の大きな変化の中で、公共図書館に求められるものも大きく変わりつつあります。このような中、これからも葛飾区立図書館が利用者の方々から愛され、魅力ある存在であり続けるためには、提供するサービスの内容や方法、情報量で独自性を発揮していくことが重要であると考えております。その一つの試みとして、私どもは、地域に関わる書籍を中心として、電子媒体ではないオリジナルの資料を収集・保存し、後世に伝えるべき地域文化の貴重な遺産として継承するという役割も、今後とも担ってまいりたいと考えております。

この『葛飾コレクション図録』では、葛飾の歴史、産業、文芸、団体、地図、定期刊行物などに関する地域資料を中心に、葛飾ゆかりの作家の方々の自筆原稿・原画・色紙もあわせて紹介させていただきました。限られた紙幅の小冊子ではございますが、ご高覧いただければ幸甚と存じます。

本図録の上梓にあたっては、葛飾ゆかりの作家の方々より、貴重なオリジナル資料をご寄贈いただいたのをはじめ、関係者の皆様から並々ならぬご助力を賜りました。ご支援を賜りましたすべての方々に厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月
葛飾区立中央図書館長
梅田 義郎

目 次

はじめに	3
目次	4
葛飾の歴史	5
葛飾の産業	13
葛飾の文化・芸能	17
葛飾の会社・団体	21
葛飾のシリーズ／その他	25
かつしかコレクション	33
「川」	34
「おもちゃ」	38
「花菖蒲」	40
地図	43
定期刊行物	47
自筆原稿・原画	53
色紙	65
AV 資料／オブジェ	71



～葛飾の歴史～

『即位記念 奥戸村誌 全』 南葛飾郡奥戸村 1917年
 (マイクロフィルム版、CD-ROM版あり)



『即位記念 奥戸村誌 全』 タイトルページ

大正4年(1915)11月10日、大正天皇の即位の礼が執り行われましたが、本書はその記念事業として南葛飾郡奥戸村により編纂・上梓されました。

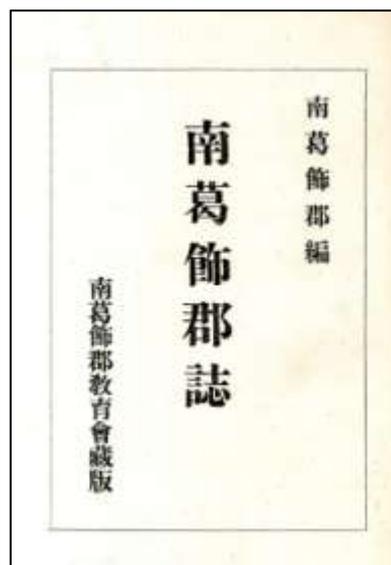
奥戸村は、明治22年(1889)の町村制の施行にともない、上小松村、下小松村、奥戸村、奥戸新田、曲金村、細田村、鎌倉新田と、上一色村および新宿町の一部が合併して発足しました。その後、昭和5年(1930)の町制施行により奥戸町となっています。

本書の内容は、奥戸村の沿革、地勢地理、人口、交通水利、産業、教育、兵事、社寺、行政機関など、あらゆる分野にわたって記述されています。

『南葛飾郡誌』 東京府南葛飾郡編纂 小松川町(東京府)南葛飾郡役所 1923年

大正12年(1923)4月、自治体としての郡制が廃止されるのを記念して、東京府南葛飾郡役所によって同年編纂されました。南葛飾郡は、現在の葛飾区、江戸川区、墨田区、それに江東区の一部からなっていました。内容は、「概観」、「自然的環境＝地形及び地質・植物・動物」、「歴史的考察」、「社会的考察」の各節からなり、古代から大正時代までの同郡の町や村の歴史について、また住民の暮らしのあらゆる分野について記録しています。

それまでの郷土史の編纂は一人のよるものが多いなか、本書は複数の専門家によって編纂がなされており、地方史の学術的研究の新たな方向性がうかがわれます。



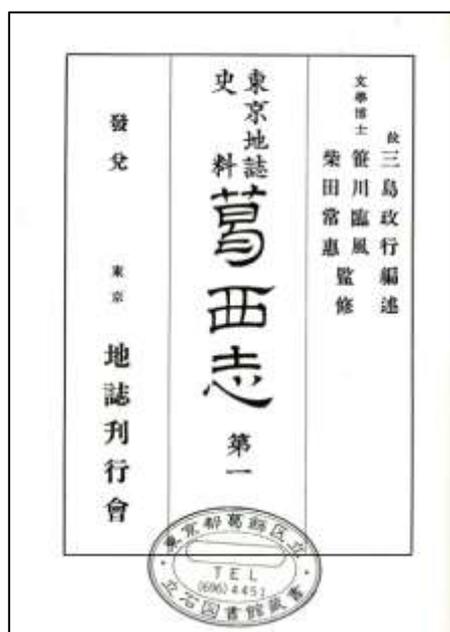
『南葛飾郡誌』 タイトルページ

『本田町誌(全)―昭和4年発行』 東京府南葛飾郡本田町役場 1929年
(CD-ROM版あり)

昭和3年(1928)3月1日、本田村から本田町へと町制施行された記念として編纂されました。内容は、「沿革」「位地面積及地勢」「区画及大字地名の起源」「戸数人口及建物」「自治」「条例規定規則及事務日誌」「財政」「教育」「衛生」「兵事」「警備」「交通及水運」「通信」「社会事業」「産業」「公益団体」「施設事業」「社寺及名所旧跡」「耕地整理組合」の全19章からなります。巻末には追補として、京成電気軌道(株)の軌道竣工期日や停留場乗降者数などの記載も見られます。



『葛西志―東京地誌史料―』第1～3巻 三島政行／編 地誌刊行会 1930～1931年

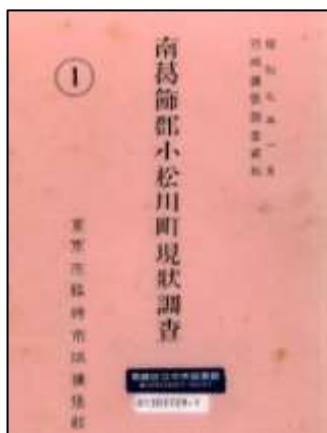


『葛西志』はかつて葛西とよばれた領域(現在の江東、墨田、葛飾、江戸川の4区)に関する地誌です。全25巻付録10巻からなり、文政4年(1821)に完成しました。この葛西という名称は、明治11年(1878)に「南葛飾郡」と改称されるまで、中世から近世をつうじて使われてきました。

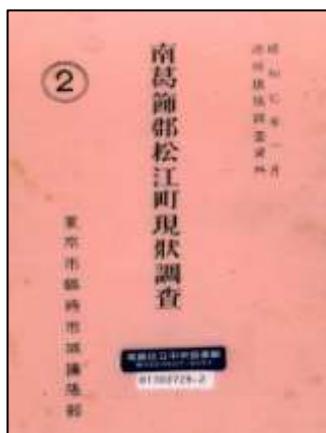
本書は昭和5年(1930)に地誌刊行会から出版された復刻版です。その後1971年に国書刊行会からも復刻版が刊行されています(『葛西志 全―東京地誌史料―』 国書刊行会 1971年)。

『葛西志―東京地誌史料―』
第1巻タイトルページ

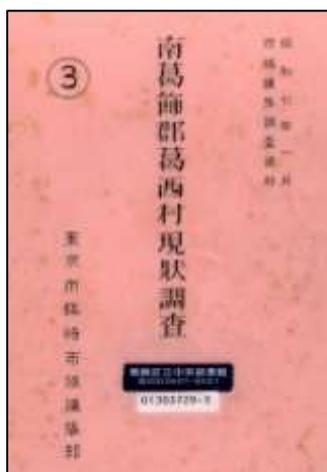
『南葛飾郡各町村現状調査—市域拡張調査資料—昭和7年1月』 東京市役所
1932年 (CD-ROM版あり)



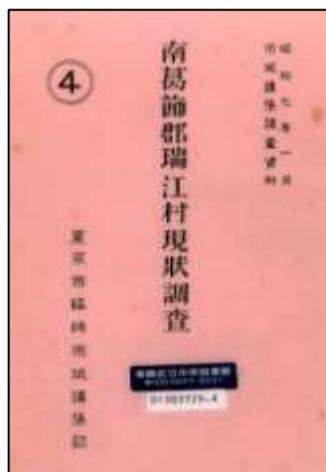
『南葛飾郡小松川町現状調査』



『南葛飾郡松江町現状調査』



『南葛飾郡葛西町現状調査』



『南葛飾郡瑞江町現状調査』

昭和7年10月に東京市の市域拡張が行われるのに先立って、東京市役所より同年1月に刊行された南葛飾郡の各町村の現状調査資料です。

昭和5年(1930)頃の各種調査・統計に基づき、各町村の「概要」、「人口」、「財政」、「教育」、「行政」、「保健衛生」、「社会事業施設」、「上水道事業」、「下水道事業」、「交通及通信」、「産業」、「社寺宗教」、「各種団体及組合」、「警備」に関する情報・データが簡潔にまとめられています。各巻の巻頭には町村の略図が掲載されています。

全20分冊からなり、各分冊は以下のとおりです。

①小松川町、②松江町、③葛西村、④瑞江村、⑤鹿本村、⑥篠崎村、⑦小岩町、⑧金町、⑨水元村、⑩新宿町、⑪奥戸町、⑫吾嬬町、⑬本田町、⑭亀青村、⑮南綾瀬町、⑯墨田町、⑰寺島町、⑱亀戸町、⑲大島町、⑳砂町。



『南葛飾郡新宿町現状調査』より
「町勢要覧」の頁(上)および目次(右)

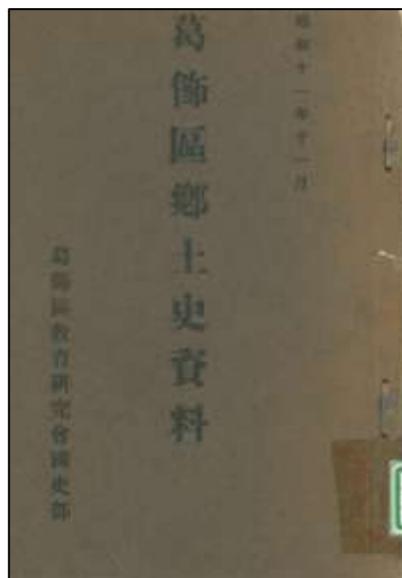


『葛飾区郷土史資料』 葛飾区教育研究会国史部／編 葛飾区教育研究会国史部
1936年 (CD-ROM版あり)

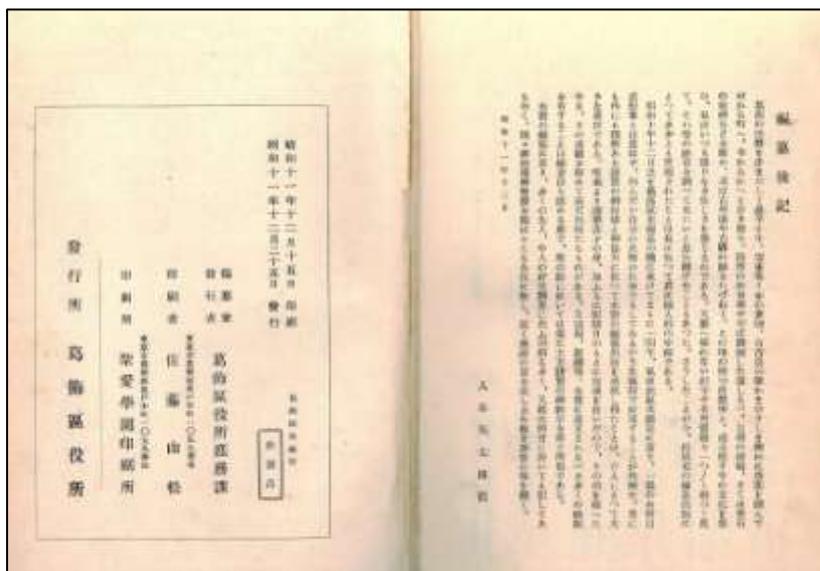
葛飾区の郷土史に関する情報が、「葛飾区沿革大要」、「町名の起源」、「神社」、「仏閣」、「名所、旧蹟、その他」、「墓、塚、石碑等」、「街道、道路」、「橋梁」、「川、堀、沼」、「区内学校沿革」、「その他の事項」の全10章、107頁にまとめられています。

巻頭には「葛飾区全図」が掲載されています。

体裁は紐とじ製本、ガリ版刷り。



『葛飾区史』 葛飾区役所／編 1936年 (CD-ROM版あり)

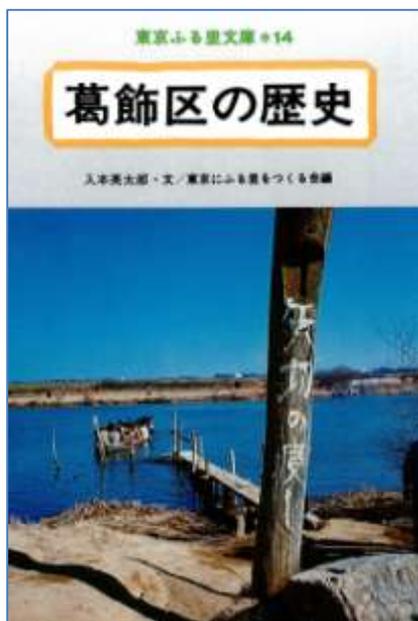


『葛飾区史』編集後記と奥付頁

本書は、昭和11年(1936)の区庁舎落成記念事業として、その当時庶務課課員であった郷土史研究家の入本英太郎氏により編纂されました。編纂者の例言によれば、もともと葛飾区史編纂の準備資料の一部として刊行されるもので、「他に適當なる書名が無いので今『葛飾区史』の名称を付した次第である」、と記されています。

本書は葛飾区役所によって編纂された最初の葛飾区史です。その後、昭和26年(1951)に、総合的な区史である『新修葛飾区史』が刊行されました。さらに昭和45年(1970)には、内容をより充実させた『葛飾区史』上・下巻、そして昭和55年(1980)には、区制50周年記念事業の一つとして、『増補 葛飾区史』上・中・下巻・年表がそれぞれ刊行されています。

『葛飾区の歴史』（東京ふる里文庫 14） 入本英太郎／文
東京にふる里をつくる会／編 名著出版 1979年



前述の葛飾区史の編纂者である入本英太郎氏が執筆した葛飾区の小通史です。『葛飾区史』の膨大な情報がバランス良くコンパクトにまとめられています。

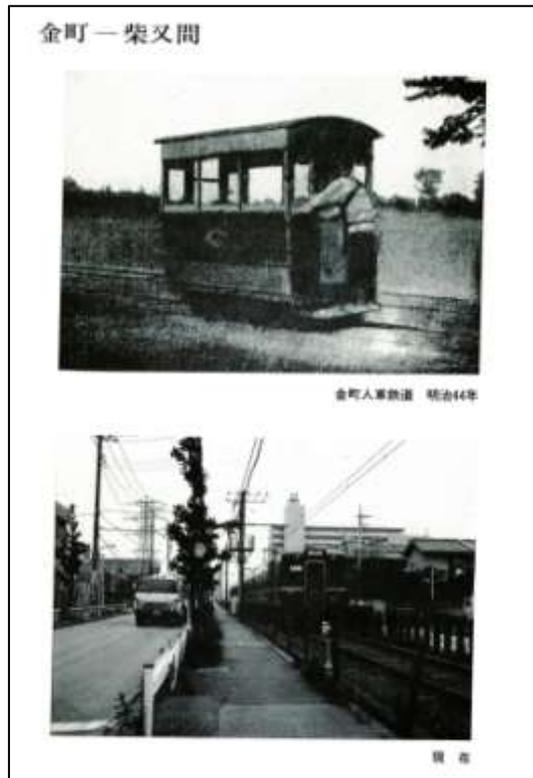
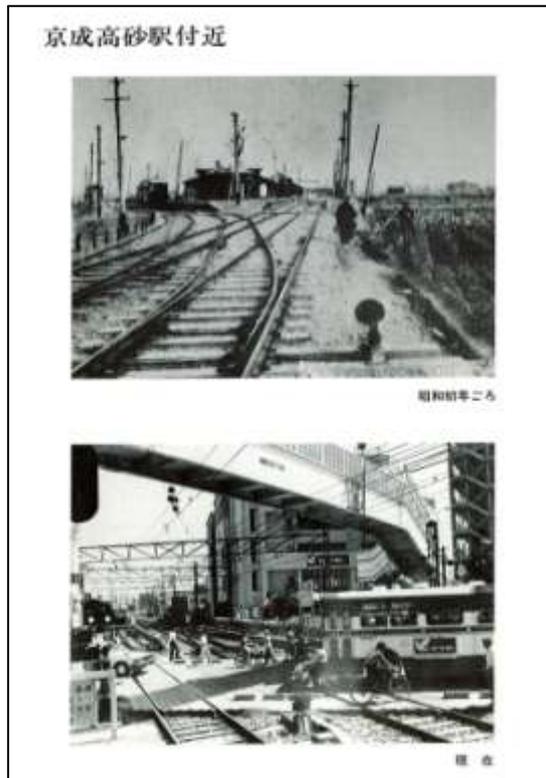
本書は『東京ふる里文庫』中の一冊として刊行されました。『東京ふる里文庫』は、子どもからお年寄りにいたるすべての人々に読んでもらい、史跡めぐりや歴史探索に役立つようにと編集された区史シリーズで、本書を含め全 23 冊が刊行されています。

『葛飾区今昔写真集 区制施行 50 周年記念』 葛飾区役所児童部 葛飾区 1982年

葛飾区は昭和 7 年（1932）、東京府南葛飾郡のうちの本田町、奥戸町、金町、水元村、新宿町、亀青村、南綾瀬町の七町村が合併され、東京市へと編入されて誕生しました。本書はその葛飾区誕生 50 周年を記念して刊行された写真集です。

各頁には、区内各所の「昔」（明治末期～昭和初期）と「今」（昭和 57 年当時）の写真が並べて紹介されています。撮影されているのは、区役所庁舎、新小岩駅前、四つ木橋、曳舟川通り、立石大通り、堀切橋、鎌倉三丁目付近、奥戸西井戸掘り用水、奥戸バス通り、京成高砂駅付近、金町一柴又間、金町駅南口、そして水元公園です。





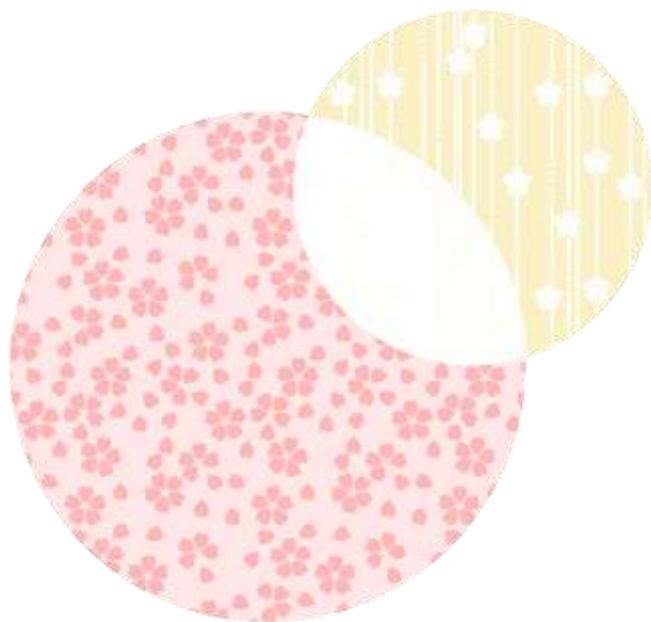
『葛飾区今昔写真集』より 「京成高砂駅付近」と「金町一柴又間」

『かつしかの地名と歴史』 葛飾区郷土と天文の博物館編 2003年



本書は2000年度に作成された葛飾区ホームページ「かつしか区めぐり」の原稿に基づき、それに2001年度から郷土と天文の博物館で実施されている区民講座「かつしかの地名と歴史」の内容の一部を加えて作成されました。

最新の区史である『増補葛飾区史』が刊行されてから相当年数経過しているなか、葛飾区郷土と天文の博物館の調査研究による新たな成果を踏まえ、最新の情報を手軽に観覧できる資料として刊行されました。古代から葛飾区が誕生するまでの変遷、区名の由来、区内の地名の変遷・由来が総括的にまとめられています。



～葛飾の産業～



工業

葛飾区の工業は、大工場が少なく中小工場が多いのが特徴です。参考資料をみると、従業員 29 人以下の工場が全工場数の 8 割を占めていることがわかります。

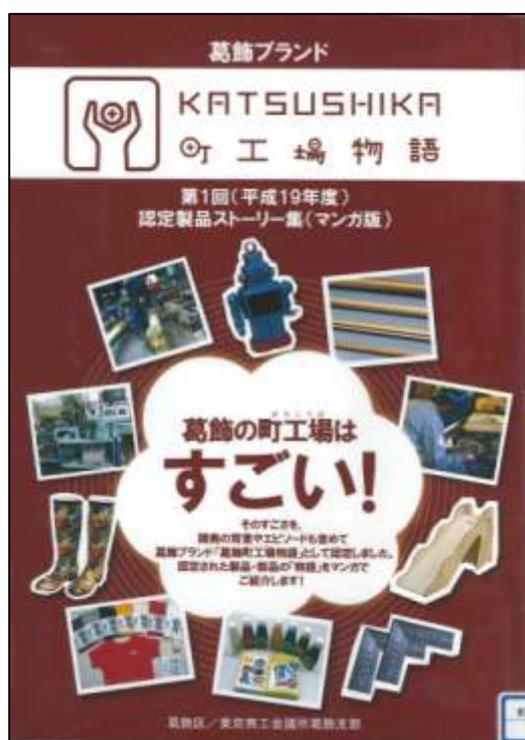
商業

小売店と飲食店の多い葛飾には 106 の商店街があります。近年、大型店舗におされ商店街は衰退傾向にありますが、イベントや特売など活性化に取り組む商店街も数多くあります。

農業

都市化・宅地化が進む東京 23 区の中で葛飾区は農業が存続している数少ない区のひとつです。区内の農地面積は昭和 40 年(1965)以降急速に減少し、632 h a から平成元年(1989)には 101 h a になりました。その後も緩やかに減少していますが、平成 16 年(2004)からは 40 h a 台を維持しています。主要野菜の平成 19 年(2007)収穫量は小松菜、キャベツ、枝豆の順になっています。

『葛飾ブランド かつしか町工場物語—認定製品ストーリー集』 葛飾区地域振興部
2007年～

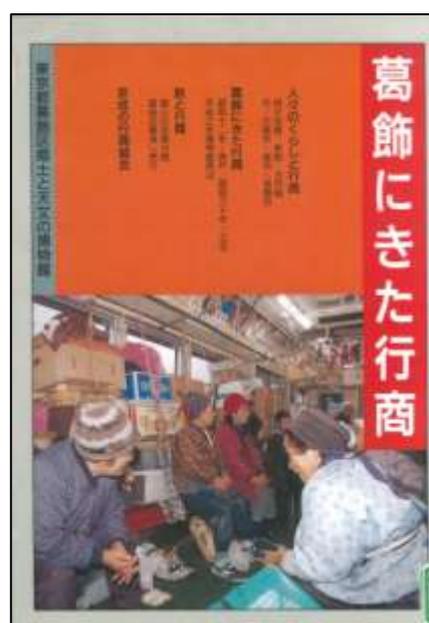


『葛飾ブランド かつしか町工場物語』
第1回(平成19年度)

地域ブランド発信事業として生まれた「葛飾町工場物語」は、葛飾区の町工場から産み出される選りすぐりの製品・部品の“すごさ”や“技”を葛飾ブランド「葛飾町工場物語」と認定して、それらが産まれた背景やエピソードなどをストーリー性豊かにマンガや文章でPRする事業です。2007(平成19)年度に発行を始めたかつしかの町工場シリーズは平成23年度(2011)、シリーズ第4作目が発行されています。

『葛飾にきた行商』 堀充宏・萩原ちとせ／著 葛飾区郷土と天文の博物館 1992年

葛飾区郷土と天文の博物館の第1回特別展図録です。葛飾区は堀切・亀有・金町など、大正時代の終わりには、駅周辺に繁華街が形成され、多くの商店が集まっていたが、大部分の地域は農村の景観を色濃く残していました。それらの農村部では日常の生活に必要な多くのものを行商から購入していました。本書はこうした行商をした人々の姿を通して、かつての葛飾区の庶民生活の一端を紹介しています。表紙の京成電鉄京成押上線の行商車両は懐かしい昭和のひとコマです。



『葛飾区伝統産業職人会』 葛飾区伝統産業職人会 2010年



葛飾区では川に囲まれた地形を生かし、染色や土を使ったやきものなどがつくられてきました。昔からの伝統技術を生かし、伝えていくために葛飾区伝統産業職人会が結成されています。

江戸小紋／小宮康孝

江戸小紋とは和服の模様染めの一種で、きわめて細かな模様を単色で染めたものです。小宮康孝氏は大正14年（1925）浅草生まれ、江戸小紋染色の伝統技法を今に伝える継承者です。昭和53年（1978）には重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されています。

なお、葛飾区立中央図書館では、小宮康孝氏のご協力をいただきまして、「宝亀」、「弁慶」、「牛若」の紋様をしおりや書架などに使用しております。



「宝亀」



「よろい蝶」



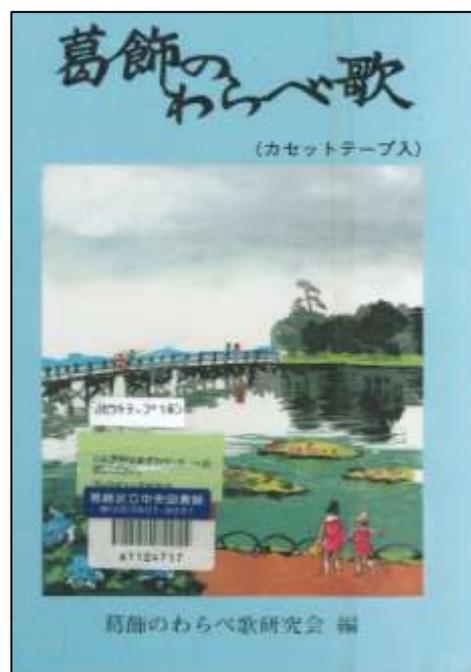
中央図書館オープン記念しおり

～葛飾の文化・芸能～

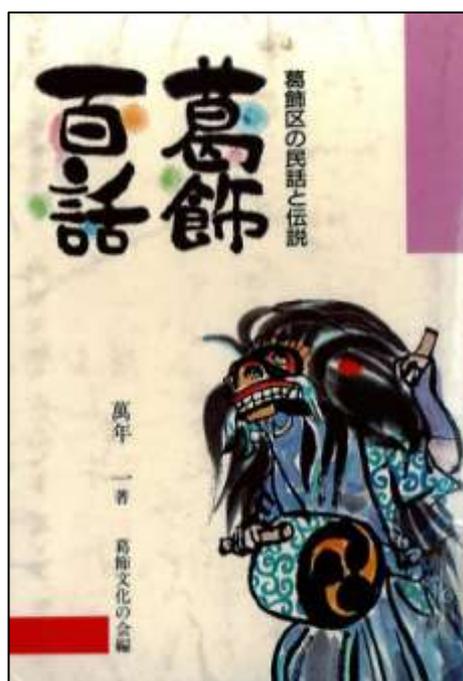
『葛飾のわらべ歌』 葛飾のわらべ歌研究会 1988年
(付録：カセットテープ1本)

「葛飾のわらべ歌研究会」によって掘りおこされた109曲のわらべ歌が収録されています。「葛飾のわらべ歌」といっても葛飾だけで歌われてきた歌という意味ではなく、全国共通の歌もあれば、葛飾独特の歌もあり、葛飾の土地で歌われ、遊ばれてきたわらべ歌が一冊の本にまとめられています。

109曲の中から選りすぐった20曲の録音テープが付録として付いています。



『葛飾百話—葛飾の民話と伝説』 万年一／著 1988年



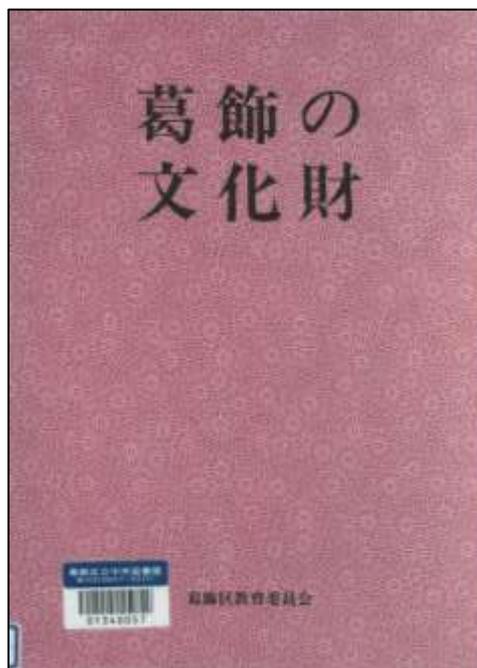
万年一氏が採録して書いた葛飾区の昔話を「葛飾文化の会」が編集し、葛飾区の民話・伝説・風習・歴史こぼれ話・産業史などが収録されています。

読み物としても楽しめる葛飾の民俗研究資料となっています。

『葛飾の文化財』 葛飾区教育委員会生涯学習部生涯学習課／編
葛飾区教育委員会生涯学習部生涯学習課 1996年

葛飾区は昭和 50 年(1975)に「葛飾区文化財保護条例」を制定し、さらに昭和 61 年(1986)に登録文化財制度を導入しています。

本書は昭和 51 年から平成 6 年(1994)までに定められた葛飾指定文化財 94 件・登録文化財 65 件を、旧 7 か町村別（水元村・金町・新宿町・亀青村・南綾瀬村・本田町・奥戸町）にまとめ、また葛飾区に所在する国重要無形文化財 1 件と東京都指定文化財 6 件も合わせて紹介しています。



『葛飾区の民俗』 I～IX 葛飾区郷土と天文の博物館 2001～2009年



郷土と天文の博物館は、昭和 60 年(1985)より葛飾区の地域別に民俗の調査を行い、あわせて「農閑の副業」、「都市近郊農村の市」、「際物作り」、「年中行事」などを調査し「葛飾区の民俗シリーズ」を刊行してきました。

葛飾の地に伝えられてきた伝承性のある行為、心意、生活様式の記録が綴られています。



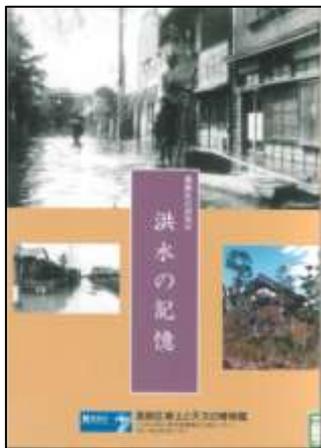
I 祭りと行事



II ものと人の交流



III 人生儀礼



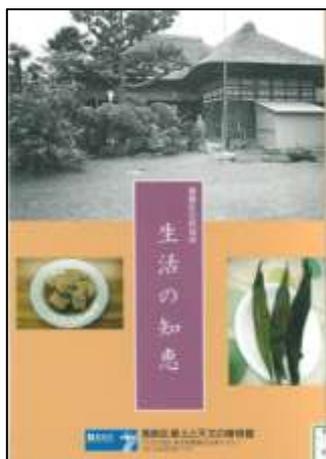
IV 洪水の記憶



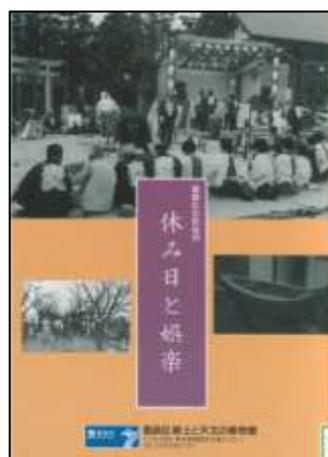
V 田んぼのある暮らし



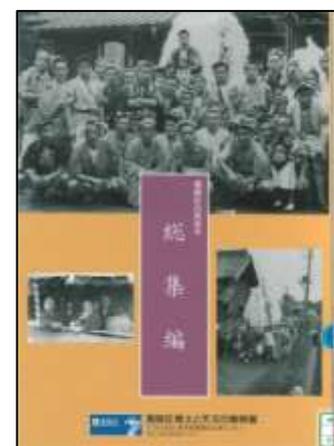
VI 鎮守の森



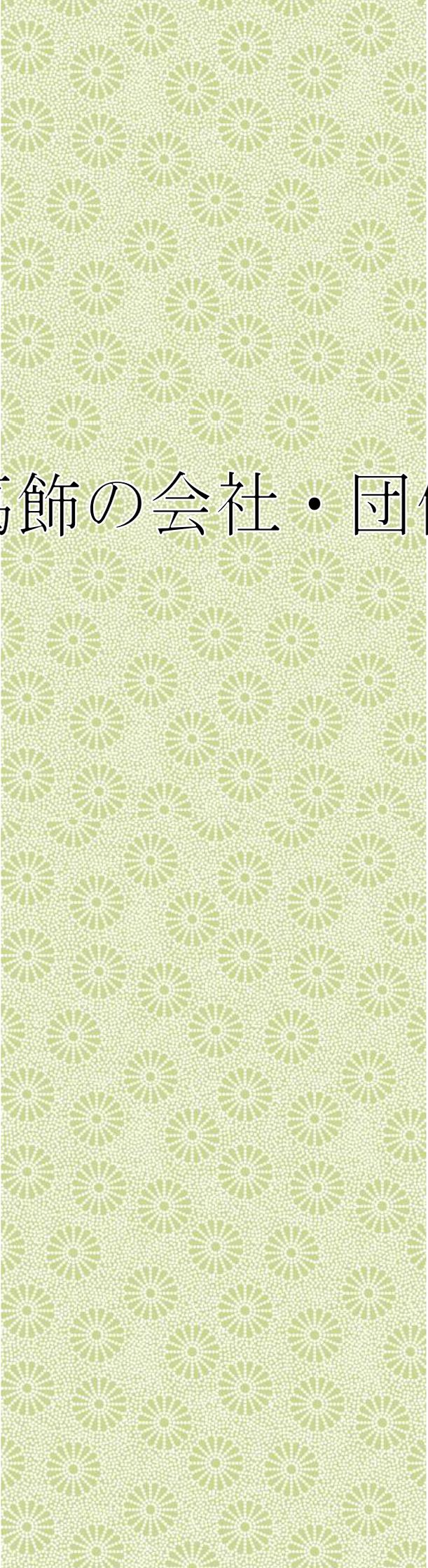
VII 生活の知恵



VIII 休み日と娯楽



IX 総集編



～葛飾の会社・団体～

『三菱製紙六十年史 1898-1958』 三菱製紙／編 1962年



『三菱製紙六十年史』タイトルページ

『旧三菱製紙株式会社中川工場煉瓦造建築物調査報告書』 葛飾区教育委員会／編
葛飾区郷土と天文の博物館 2007年

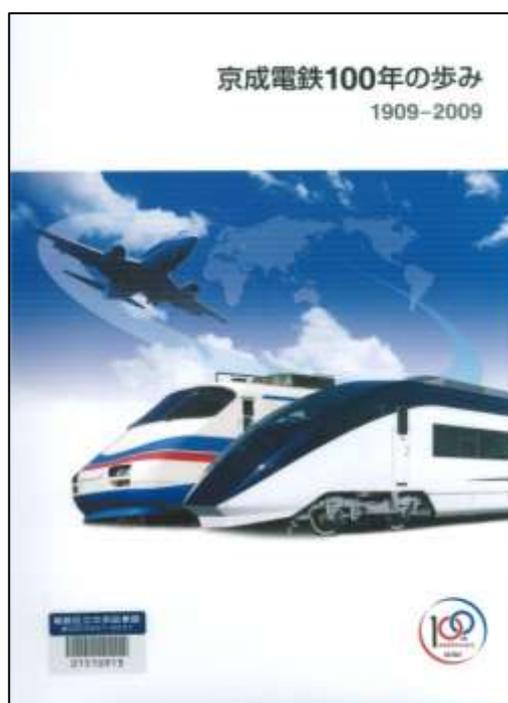
葛飾は大正初期に工業の近代化が進み、舟運や河水を利用する工業として製紙業、染色工業、布さらし工業などが発達しました。三菱製紙中川工場は大正6年（1917）に創設され、社史には当時の新宿・金町付近の産業の状況が描写されています。



『京成電鉄85年の歩み』 京成電鉄株式会社総務部／編 京成電鉄 1996年



『京成電鉄100年の歩み 1909-2009』 京成電鉄経営統括部／編 京成電鉄 2009年



葛飾にとって京成線は古くから馴染みのある鉄道です。明治時代には柴又～金町間を人が押す帝釈人車鉄道が走っていましたが、京成電鉄はその営業承継をしています。そして、京成金町線の柴又駅といえば、映画「男はつらいよ」の寅さんをホームで見送るシーンが印象的です。葛飾区役所の最寄り駅も京成線の立石駅です。

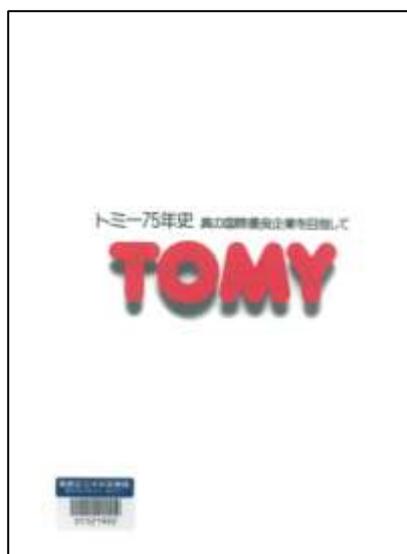
『こすげ百年—小菅監獄・東京集治監 東京拘置所・小菅刑務所—』 絵ハガキ 10 枚



絵ハガキ

昭和 12 年（1937）、市谷刑務所を改称し、わが国最初の拘置所「東京拘置所」が豊島区西巣鴨の地に発足しました。その後、昭和 46 年（1971）に巣鴨から小菅に移転し、それまでの小菅刑務所は廃庁となりました。

『トミー75年史—真の国際優良企業を目指してTOMY—』 トミー 2000 年



現在のタカラトミーは平成 18 年（2006）に「株式会社タカラ」と「株式会社トミー」が合併してできた会社です。タカラの創立は昭和 30 年（1955）、「有限会社 佐藤ビニール工業所」（宝町）に始まり、数回の商号変更を経て昭和 41 年（1966）に「株式会社タカラ」となりました。一方、トミーは大正 13 年（1924）、当時の東京府北豊島郡西巣鴨町に「富山玩具製作所」として創設されました。昭和 38 年（1963）に「トミー工業株式会社」に商号変更し、昭和 44 年（1969）に立石に本社社屋が新築されました。

～葛飾のシリーズ/その他～

『かつしかブックレット』葛飾区郷土と天文の博物館刊、1～15巻

葛飾区郷土と天文の博物館が刊行してきた各種報告書より、わかりやすく読みやすい内容をめざしテーマ別に編集し、平成5年(1993)3月より刊行しています。カラー写真多数のヴィジュアル版となっています。



- 1 木下川薬師—歴史と文化財
- 2 葛飾遺跡探訪
- 3 葛飾区の伝統技術
- 4 新小岩御メ講
- 5 スターウォッチングに出かけよう！
- 6 身近にできるはじめての星空の観察
- 7 年表・葛飾の歴史 古代・中世
- 8 花菖蒲—江戸の面影・堀切菖蒲園—
- 9 葛飾区の年中行事
- 10 葛飾遺跡探訪 改訂版
- 11 すばる「夢の望遠鏡」
- 12 江戸・東京のやきもの—かつしかの今戸焼
- 13 花菖蒲 II—HORIKIRI JAPAN
- 14 花菖蒲 III—伝統の堀切菖蒲園
- 15 帝釈人車鉄道—全国人車データマップ—

『可豆思賀』1～3、別冊 葛飾区郷土と天文の博物館

葛飾区郷土と天文の博物館ボランティアである「葛飾探偵団」の調査結果、研究成果をまとめて刊行したものです。

『可豆思賀 1』

「葛飾区内の小・中学校の校章と校歌」「葛飾の用水路、葛飾の神々」等が収録。

『可豆思賀 2』

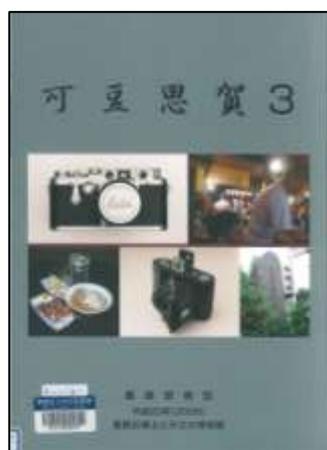
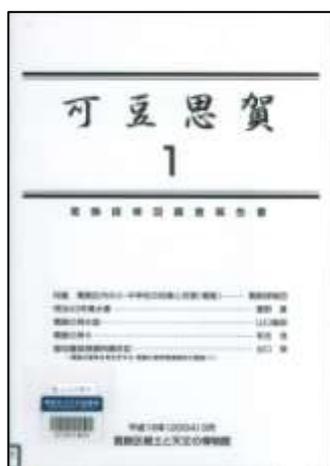
「再新鋭高高度戦闘機キ94と金町」、「【綴方教室】の舞台・四つ木の映画館」等を収録。

『可豆思賀 3』

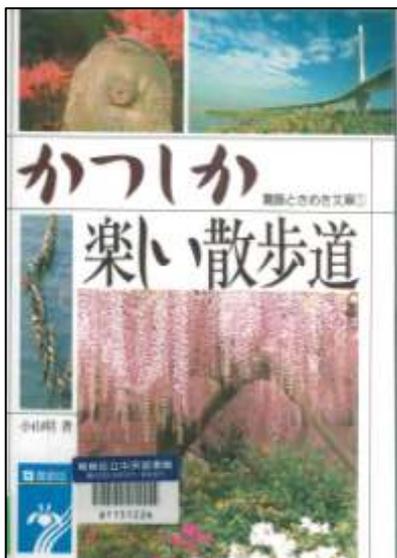
「【葛飾新聞】紙上に描き出された葛飾区の戦後風景」、「ライカを目指した葛飾うまれのカメラ【レオタックス】」等を収録。

『可豆思賀 別冊 葛飾写真館 かつしか昭和の風景』

平成16年(2004)葛飾探偵団のメンバーが写した昭和を物語る区内の風景や、日常生活を中心に葛飾写真館「かつしか昭和の風景」を郷土と天文の博物館で開催しました。その中から、団員山口敏郎さんが撮影した主に昭和30年(1955)代の写真を中心に団員が選別、分類、編集した写真集です。



『葛飾ときめき文庫』全3巻 葛飾区企画部広報課／編



1 かつしか楽しい散歩道 1989

名所・旧跡を訪ね、昔話、地域文化にふれられる
15の散策コースがカラーで紹介されています。

2 愛する風物 風景 1990

葛飾の下町風情と豊かな自然を中心に四季
折々の写真がつづられています。



3 かつしか嬉しい祭りと行事

区内に古くから伝わる民俗芸能や寺社の祭り、区が行
う行事などの歴史、特徴がカラー写真と解説で綴られて
います。



『かつしかの地誌』 1,2 (葛飾区古文書史料集 10, 13) 葛飾区郷土と天文の博物館



葛飾区関連の記述のある江戸時代の地誌 30 数点のなかから、1 に 21 点、2 に 16 点を年代順に収録し、巻末にはていねいな解説が付いています。

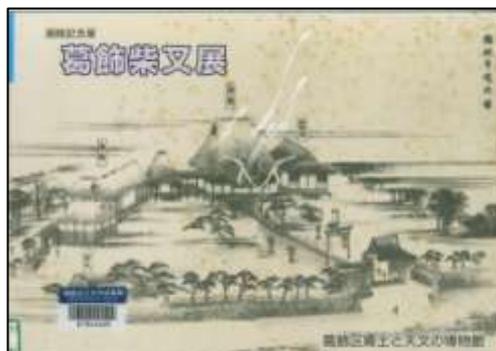
『かつしかの紀行文』(葛飾区古文書史料集 8) 葛飾区郷土と天文の博物館 1995 年

江戸時代中期以降、旅の様子や名所・旧跡を訪ねて伝説や風俗を見たままに著す紀行文が数多く記されました。本書には『増補 葛飾区史』にも一部収録されている「嘉陵紀行」「遊歴雑記」「小金紀行」なども含めた 18 編、葛飾およびその周辺に関連する記事が収録されています。



『開館記念展 葛飾柴又展』 葛飾区郷土と天文の博物館／編 1991年

郷土と天文の博物館開館記念展として開催された「葛飾柴又展」の記録です。2000年前に柴又付近が陸化し、人が住み始めた時期から、奈良時代、鎌倉時代以降、江戸時代以降の柴又に関する研究がまとめられ、柴又における歳事や江戸川とのつながり、帝釈天人車鉄道、帝釈天と参道などについて、カラー図版とともに解説されています。



葛飾区自然観察ガイドシリーズ

葛飾区建築環境部環境課／編 みずもと自然観察クラブ／編

『水元の野鳥』

(葛飾区自然観察ガイドシリーズ 1) 1990年

地元の自然保護団体である「みずもと自然観察クラブ」の制作・編集、日本野鳥の会の藤本和典氏監修による、カラー版の野鳥ガイドです。英語訳、中国語訳も表記されています。



『葛飾の野草』

(葛飾区自然観察ガイドシリーズ 2) 1991年

葛飾区内の原っぱや空き地、田畑、あぜ道、校庭、河川敷に生えている植物、多くは雑草、人里植物と呼ばれているもの、帰化植物を含め、おもに花の咲く植物を中心に採録されています。



『葛飾の昆虫・クモ』

(葛飾区自然観察ガイドシリーズ 3) 1992年

葛飾区内に生息する代表的な昆虫と、身近なところにいるながら、あまり知られていないクモの仲間について、カラー写真と解説が収録されています。



『葛飾の水辺の生き物』

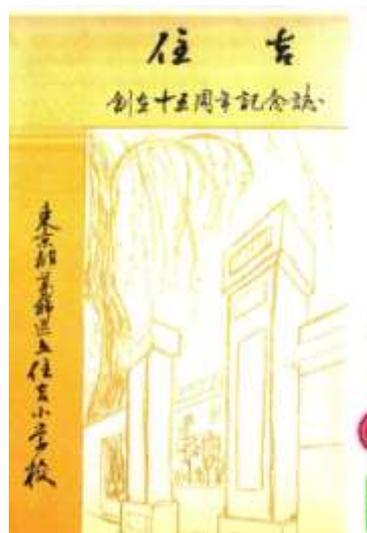
(葛飾区自然観察ガイドシリーズ 4) 1993年

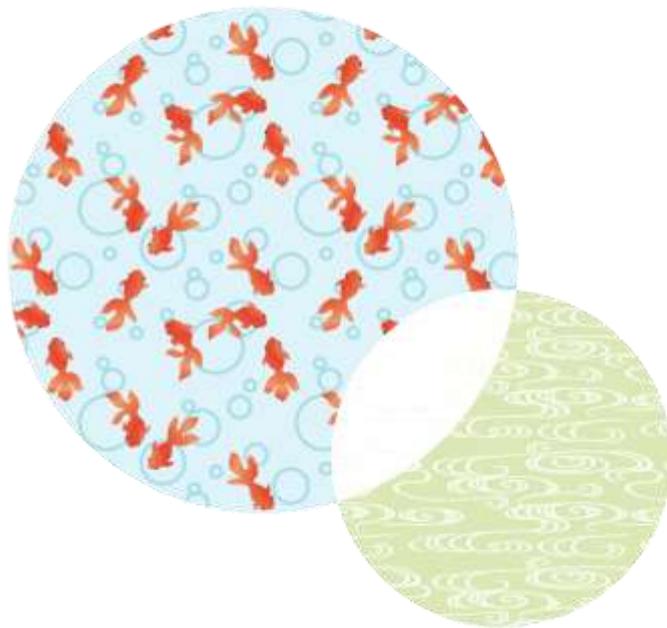
葛飾区の川や池、その他の水辺に生息する代表的な生物をカラーで収録。葛飾水辺の生き物観察マップと、葛飾の代表的な水辺の紹介もあります。

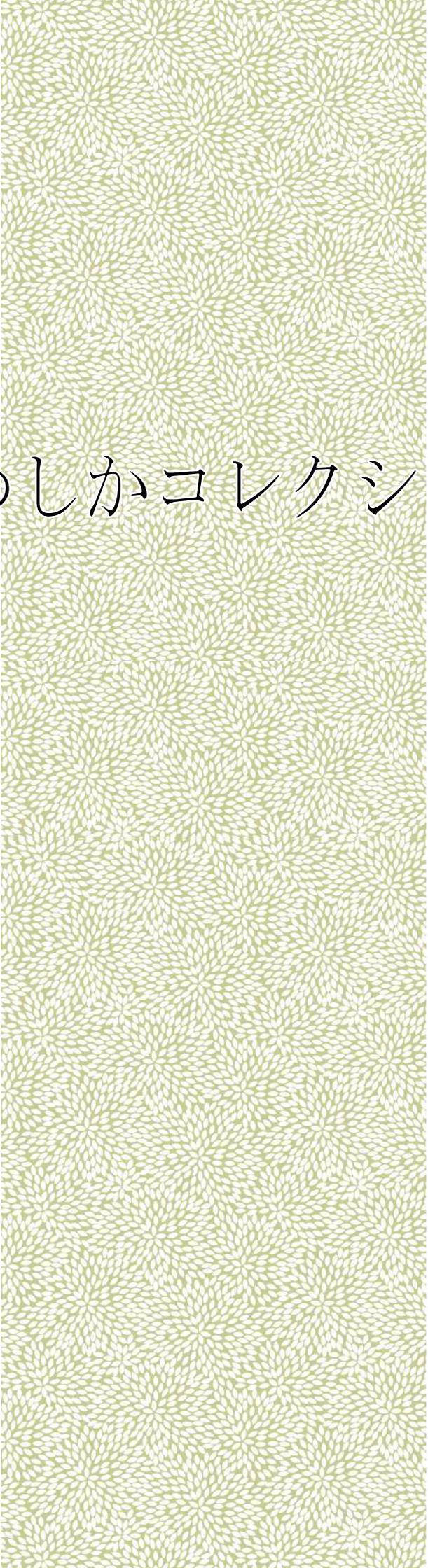


学校記念誌 (各校周年事業時作成) 区内小・中学校

区内の小中学校が周年記念行事をおこなった年に作成した記念誌で寄贈いただいたものを約 240 点ほど所蔵しています。発行の古いものでは昭和 25 年 (1950) の「住吉-葛飾区立住吉小学校創立十五周年記念誌」があります。また創立年の古い学校の記念誌として、平成 16 年度に『葛飾区立本田小学校-創立 130 周年記念誌』が発行されています。







～かつしかコレクション～

中央図書館では、メインカウンター脇に、「かつしかコーナー」を設置し、葛飾区にとりわけ係わりのある、「川」、「菖蒲」、「おもちゃ」、「寅さん」に関連する資料を「かつしかコレクション」として収集、展示しています。その中でも、本図録では、「川」、「おもちゃ」「菖蒲」に関する資料を収録しました。

川

葛飾区は、西から順に、荒川放水路、綾瀬川、中川、中川放水路（新中川）、江戸川と5つの河川がある「川のみち」です。川は、飲料水や農業・工業・伝統産業に利用され、葛飾に生活する人々にとって欠かせない存在ではあります。

しかし、川は時には、人々の生活を脅かす存在でもありました。昭和22年(1947)9月のカスリーン台風時には、利根川の堤防が決壊し、葛飾区内に濁流が流れ込み、区内の浸水の最高深度は、3.2mにも達し、死者3名、負傷者3名、行方不明1名を出し、床上浸水は5万2758件に達しました。

川と切っても切れない関係にある葛飾区は、葛飾区役所で使用される封筒や車両、標識類に使用するコミュニケーションマークとして、江戸川、中川、荒川をイメージした3本の川の流れが花菖蒲とともにデザインされています。

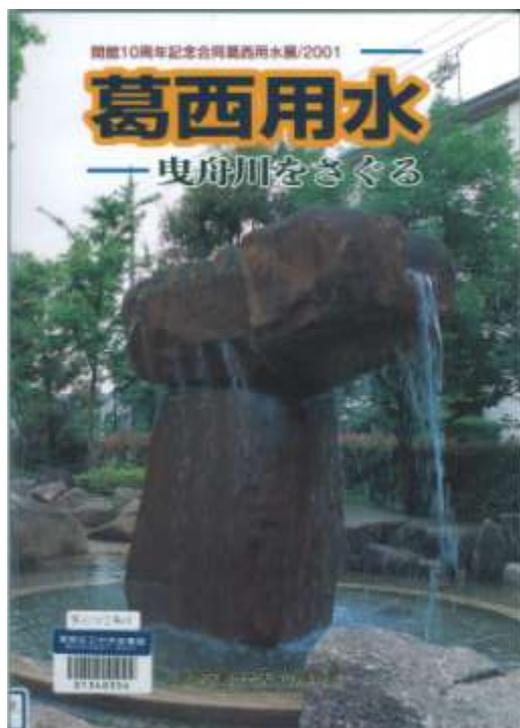
『荒川兩岸まち歩き（小菅・堀切・四つ木）』 あらかわ学会歴史民俗委員会／監修 あらかわ学会 2007年

古くから水害に悩まされてきた「東京低地」の一部である葛飾区を流れる荒川の沿岸地域、小菅・堀切・四つ木地域についての歴史・見どころを紹介するとともに、町歩きをするときに活用されるべく作成されたブックレット。

荒川学会ではこのほかにも、荒川に関連する資料を刊行しています。



『葛西用水―曳舟川をさぐる―開館 10 周年記念合同葛西用水展―2001』
葛飾区郷土と天文の博物館 2001 年

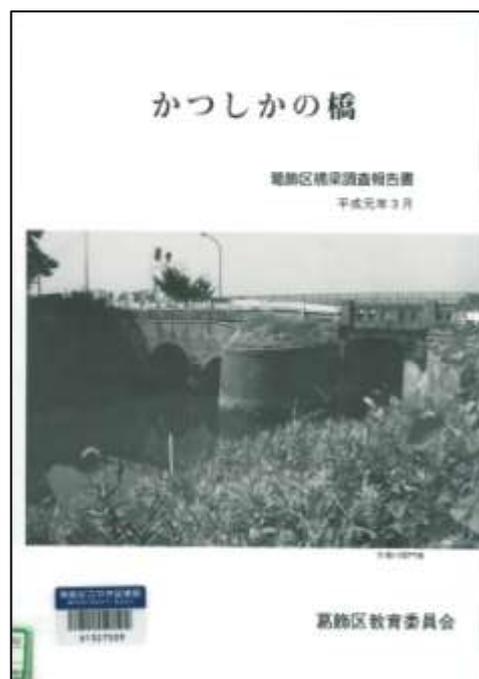


平成 13 年(2001)に郷土と天文の博物館開館 10 周年記念合同葛西用水展として、埼玉県立文書館、八潮市立資料館、春日部市郷土資料館、鷺宮町立郷土資料館と合同で開催された同名の展示会の図録。昭和 40 年代にその役目を終え、現在では親水公園に姿を変えてしまった葛西用水の自然、歴史、地誌等についての貴重な史・資料が掲載されています。

『かつしかの橋―葛飾区橋梁調査報告書―』 葛飾区教育委員会社会教育課／編
葛飾区教育委員会社会教育課 1989 年

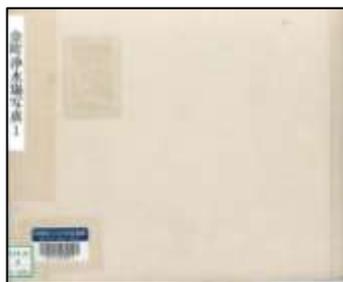
古くから多くの河川や水路がある葛飾区。産業経済の発展や下水道の普及により、多くの河川や水路が次々と緑道や、親水公園に姿を変えつつあります。

そのような一連の流れの中で文化財保護事業の一環として、行われてきた文化財の調査で行われた橋梁の調査によって得られた結果を活用し作成された、川の町葛飾を知る上で必須の資料です。



『金町浄水場写真』 1～7 松戸 撮影年不明 7枚 12×16cm

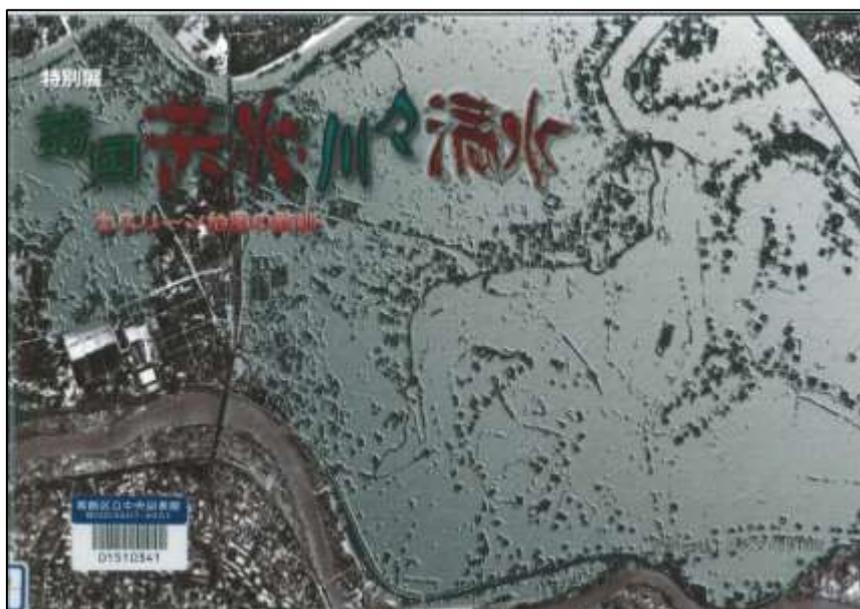
金町浄水場は葛飾区金町にある東京都水道局の浄水場です。大正 15 年（1926）8 月に竣工・通水しました。本資料はその金町浄水場の景観や施設を撮影した原写真 7 枚です。台紙 7 枚に写真が 1 枚ずつ貼り付けられています。



「金町浄水場写真」 1 より

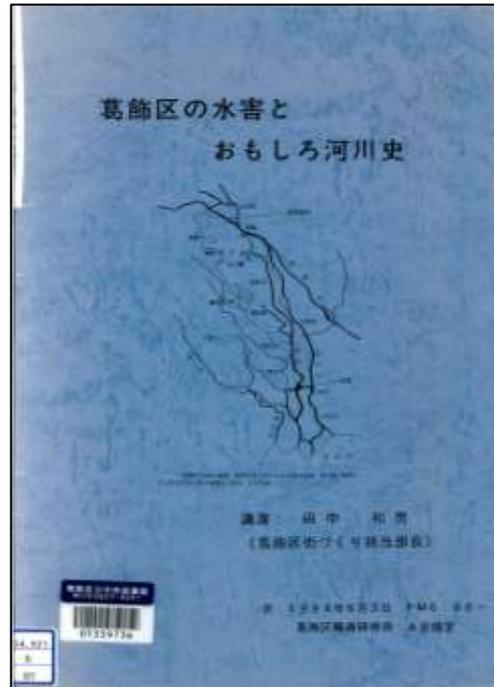


『特別展一 諸国洪水・川々満水ーカスリーン台風の教訓』
葛飾区郷土と天文の博物館 2007 年



平成 19 年（2001）3 月から 5 月まで葛飾区郷土と天文の博物館で開催された特別展の展示図録です。利根川水系と密接な関係にある葛飾区と東京低地も含めた洪水の歴史についての貴重な資料が一望できます。

『葛飾区の水害とおもしろ河川史』 田中和男／講演 葛飾区建設部 1994年



平成6年(1994)当時、葛飾区の街づくり担当部長であった田中和男氏が行った、江戸初期の時代から八代将軍吉宗の時代を経て、今日に至るまでの治水事業の変遷や逸話など、治水対策からみた葛飾区の河川の側面が開説された資料です。

おもちゃ

葛飾区はセルロイド人形発祥の地です。現在でも、玩具大手メーカーでリカちゃん人形、チョコQ、プラレール、鉄道模型を製造販売しているタカラトミーをはじめ、おもちゃにかかわる数多くの事業所があります。

『リカパラダイス』 齋門富士男／著 ぴあ株式会社 2003年



ファッションからカルチャー領域まで熱い支持を得ている齋門氏が、南の島で「リカちゃん人形」をモデルに「生身のモデルより美しく」「ファッションナブルに」を撮り下ろした写真集で、リカちゃん人形が1体付録としてついています。

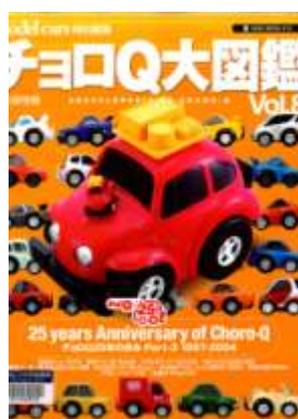
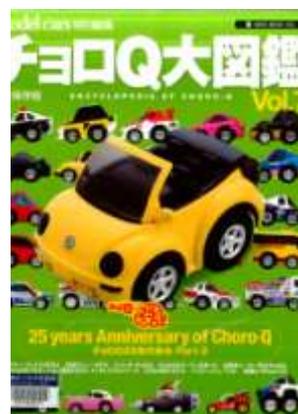
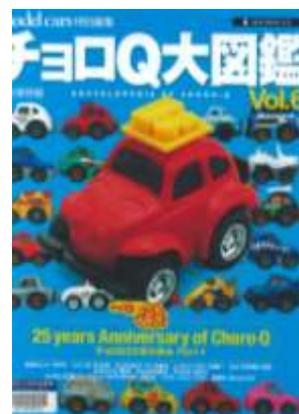
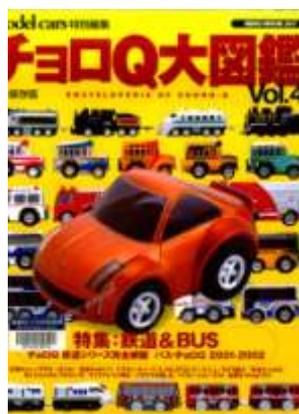
『リカちゃん大図鑑—生誕 35 周年記念 1967—2002—』 ヌーベルグー
2002年



平成14年(2002)のリカちゃん生誕35周年を記念して作られたコンプリート・ブック。「一億円リカちゃん」から幻の限定版まで、リカちゃんの全てが一冊にまとまっています。

付録として、「歴代リカちゃんピンナップ(2枚)」「お宝リカちゃんシール(1枚)」「初代リカちゃん復刻ポストカード&4代目リカちゃんポストカード(2枚)」などがついています。

『チョロQ大図鑑 VOL.1～VOL.10』 ネコ・パブリッシング



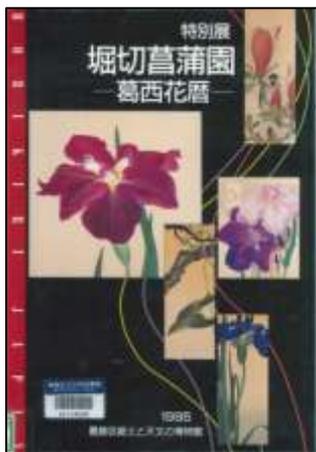
TAKARA から 1980 年代に発売され、小中学生の間で爆発的人気を誇ったチョロQ。発売当初から現在に至るまで、オーソドックスなもので 99 種が発売され、その他にもバラエティに富む商品が発売されて、人気を博しました。

『チョロQ大図鑑』は 1999 年～2006 年にかけて発行されたチョロQの図鑑で、その歴史や様々な形体のチョロQについて豊富な写真を使って解説している資料です。

花菖蒲

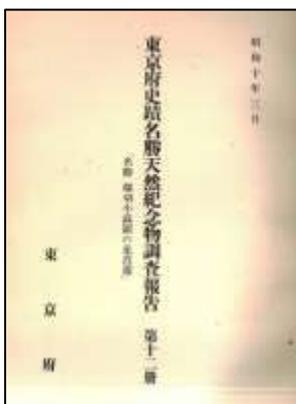
花菖蒲は葛飾区の区花です。堀切菖蒲園や水元公園の花菖蒲は特に有名で、かつて堀切の花菖蒲は、江戸の名所として、江戸名所図会や広重の錦絵にも取り上げられました。葛飾区役所で使用される封筒や車両、標識類に使用するコミュニケーションマークにも、花菖蒲が描かれています。

『特別展 堀切菖蒲園—葛西花暦—』 郷土と天文の博物館 1995年



平成7年(1995)に3月7日から5月7日を会期に開催された特別展「HORIKIRI JAPAN 堀切菖蒲園～葛西花暦～」の展示図録です。展示会は現在葛飾区堀切に「堀切菖蒲園」の駅名として残っている、かつて存在したいくつかの菖蒲園の歴史と繁栄を、現存する資料や浮世絵によって再現することを目的としたもので、展示された資料や、浮世絵が掲載されています。

『名勝堀切小高園の花菖蒲』東京府史蹟名勝天然記念物調査報告 東京府 1935年



東京府の史蹟名勝天然記念物保存法により名勝として指定された「堀切小高園」の花菖蒲の調査を、理学博士三好學氏に委嘱しまとめたものです。100種の品種名のもと、花菖蒲の形態、色彩が記録され、小高園の平面図等も付いています。ボタニカルアートの手法で花菖蒲が15種、8ページにわたりカラーで描かれています。

『名勝堀切小高園の花菖蒲』の
タイトルページとカラーページ

『花菖蒲図譜—明治神宮外苑—』 明治神宮社務所／編 明治神宮社務所 1962年



明治神宮社務所が明治天皇 50 年祭を記念して刊行した図譜です。掲載されている花菖蒲の原図は昭和 29 年から 33 年の 5 年間の間に明治神宮の江戸花菖蒲百種を、当時新進気鋭の日本画家だった渡辺明節氏、金(旧姓河内)船子氏、鈴木芳子氏の三画伯が写生し、原色印刷し、図譜としました。巻頭に、明治神宮の花菖蒲に関する解説があり、巻末にその英訳も付された貴重な資料です。

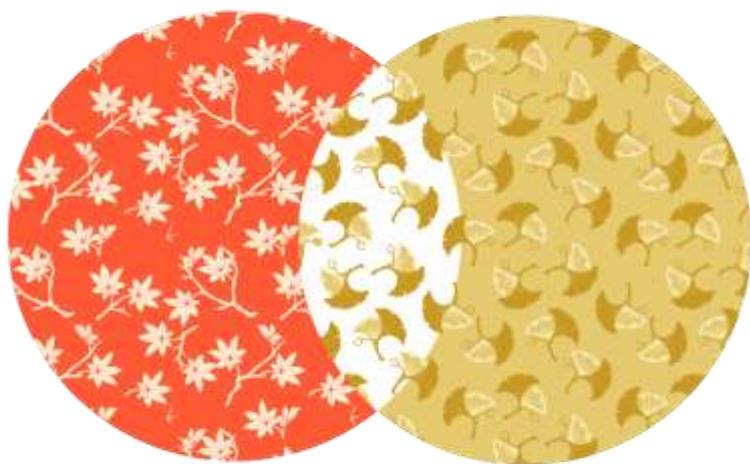
『葛飾区古文書資料集 11 堀切と花菖蒲』 葛飾区郷土と天文の博物館 1988年

堀切菖蒲園関連の史・資料を収録し、昭和 62 年に刊行が開始された葛飾区古文書資料集 11 冊目。

平成 6 年に開催された特別展「HORIKIRI JAPAN 堀切菖蒲園～葛西花暦～」での成果を加えた史料集で、堀切菖蒲園関連の史・資料を網羅しています。

松平定朝(1773～1856)の著作 3 点と、近世における堀切の花菖蒲栽培・菖蒲園経営に関連する資料 13 点のほか、未公開の史料も新たに加えられています。





～地図～

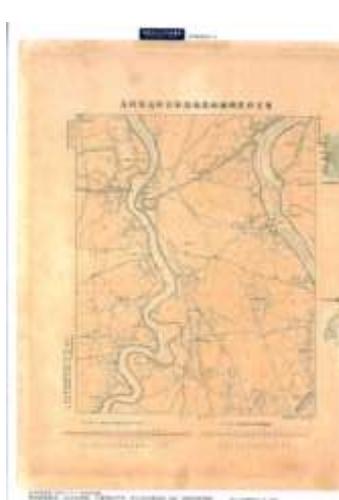
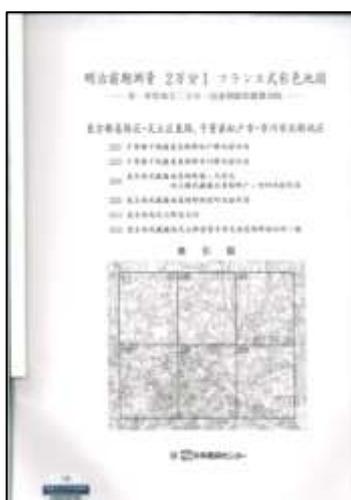
『武蔵國全圖—安政三年（一八五六年）—』（復刻古地図 3-1） 人文社 19—年



『武蔵國全圖』部分

徳川時代の初期、今の葛飾区に相当する地域へもかなり開墾事業が行われ、その時期に前後して、江戸幕府は全国的に国郡絵図の作成を行いました。（『増補 葛飾区史』より）
葛飾地域の村に、柴又・金町・新宿・上小合・亀青・青戸などの地名が読み取れます。
中央図書館では人文社の復刻古地図版で所蔵、79×110cmの地図を折りたたみ、27×15cmのパッケージに入れています。

『明治前期測量 2 万分 1 フランス式彩色地図—第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖覆刻版—東京都葛飾区・足立区東部，千葉県松戸市・市川市北部地区』
日本地図センター 1996 年



明治初期陸軍参謀本部は、わが国初の広域測量を行い、近代的な初めての地図を作ります。フランス方式の彩色図として作成され、多色刷りの美しい地図6葉と、解説書がセットになっています。

東京府武蔵國南葛飾郡新宿町近傍村落
（東京都葛飾区・足立区東部，千葉県松戸市・市川市北部地区 225）

『明治 38 年 東京府南葛飾群全図 1/24000』（『増補 葛飾区史 年表』付録）
葛飾区役所 1985 年



『明治 38 年 東京府南葛飾群全図 1/24000』部分

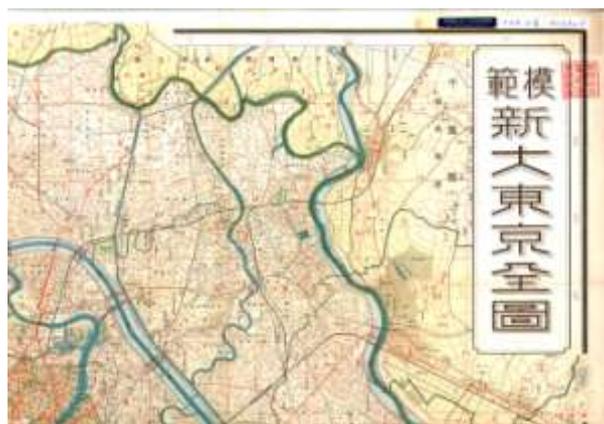
『増補 葛飾区史 年表』の付図として収録。
縮尺 1/24000 の 1 枚ものの地図です。

明治 11 年（1878）地方自治制度の再編成が行われ、区部は麴町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、浅草、本所、深川の 15 区と、郡部に荏原、東多摩、南豊島、北豊島、南安達、南葛飾の 6 郡が設置され、現在の葛飾区域は南葛飾郡に属しました。

『模範新大東京全図一昭和 13 年一』 人文社

縮尺 1/40000 地図。昭和 7（1932）年九段書房発行の地図が昭和 13 年（1938）に訂正 41 版として発行されたものの復刻版。

金町駅前に「東京モスリン金町工場」の記載があります。



『模範新大東京全図』部分

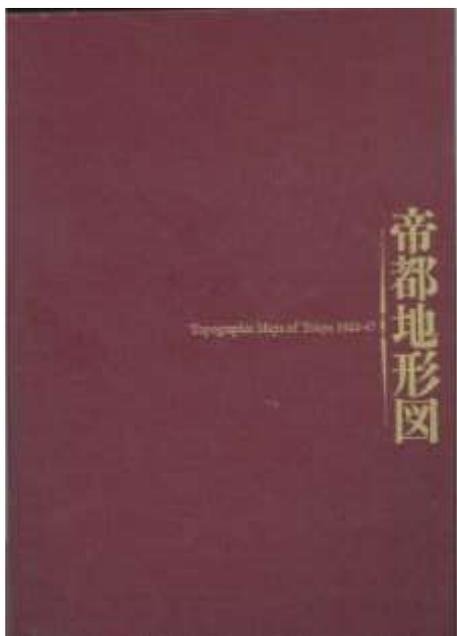
『葛飾区詳細図一復刻大東京三十五区分詳細図 34一昭和 16 年』 昭和礼文社



『葛飾区詳細図』部分

昭和 16 年（1941）、地形社によって編集された地図の覆刻版です。昭和 7 年（1932）に、それまでの東京 15 区は 35 区に組み換えられ、葛飾区域も収録されています。地図上に「葛飾区新旧町名一覧表」が掲載されています。

『帝都地形図』第2集 井口悦男／編 之潮 2005年



吉川弘文館の元社長が、自分の理想の地図を作りたいとの思いで会社を興し作成した地図です。

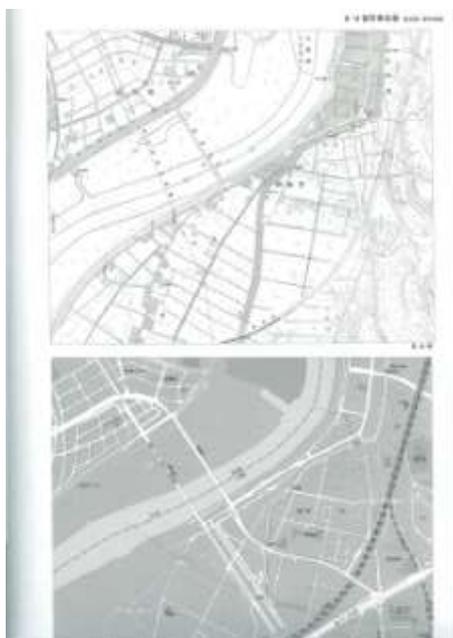
元となった地図は旧内務省が都市計画用に作った地図で、戦後復興の基礎資料にもなりました。現在の地図を併せて収録し、読む地図となっています。

全5集の内、葛飾区は主に第2集に収録されています。



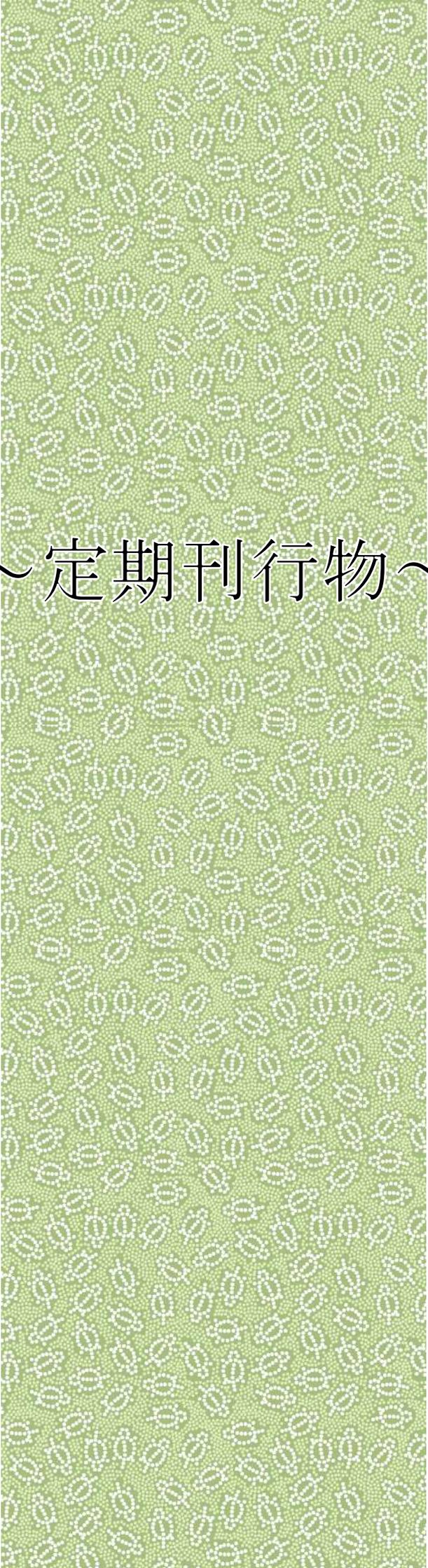
『帝都地形図』第2集 p 131

8-8 金町北部 見出図・現代地図



『帝都地形図』第2集 p 135

8-9 金町北部 見出図・現代地図



～定期刊行物～

葛飾区発行の主な情報誌

『広報かつしか』



区内で開催される行事や行政のお知らせ、講座案内等は、葛飾区の広報紙に掲載されます。『広報かつしか』は現在、月3回、毎月5のつく日（5・15・25日）に発行され、各戸配布されています。区内の公共施設や駅にも設置されているので区民の目にふれる機会の多い情報紙です。

『広報かつしか縮刷版』

昭和23年（1948）9月発行の第1号から保存。
現在、第1集～第17集（1393号）まで刊行済み。



『スポーツかつしかー葛飾区スポーツ振興公社情報誌』

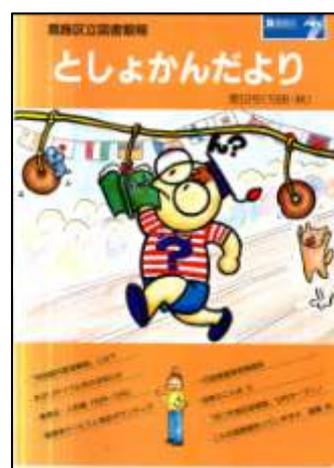


平成元年（1989）創刊号～平成17年（2005）3月号までの縮刷版。

発行元のスポーツ振興公社が廃止となり、それまで発行したものがまとめられています。

『葛飾図書館報』

昭和43年（1968）創刊号～平成22年（2010）第75号までを3分冊にまとめました。手作り感あふれる図書館の情報誌です。



『かつしかの図書館』（年刊）

昭和 63 年度（1988）から毎年発行している図書館の統計情報です。
図書館のおもな出来事や蔵書数・利用状況などを掲載しています。



『葛飾区統計書』（年刊）

昭和 30 年度（1955）統計の「第 1 回葛飾区統計書」（1956 年発行）より保存しています。葛飾区の人口、経済、社会および文化などの各分野に関する統計資料が収録されています。



『昭和 30 年 葛飾区統計書』のタイトルページ

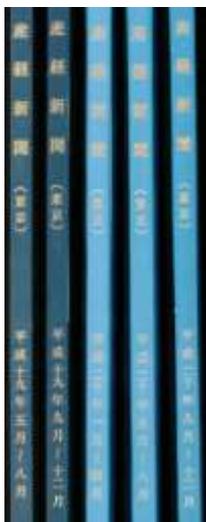
新聞社発行の地域情報版

『葛飾新聞』 葛飾新聞社発行

昭和22年(1947)6月15日～昭和27年(1952)5月25日発行(1号～12号、1号～207号)の原本とCD-ROM。週刊発行、1枚刷りの地元密着新聞。途中『葛飾自治新聞』に名称変更していますが、再び『葛飾新聞』に戻っています。



『サンケイ新聞 江東版・東京版・下町版』 サンケイ新聞社発行



本紙より地方版のみをまとめ、原紙製本しています。
昭和40年(1965)1月より収集。



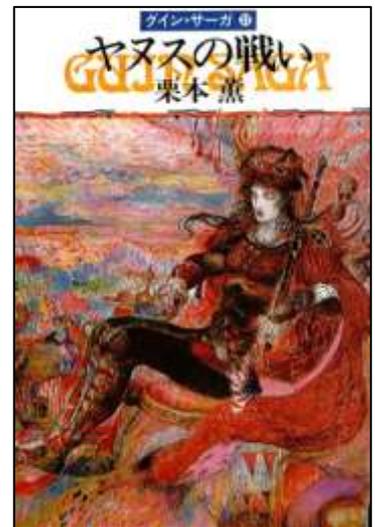
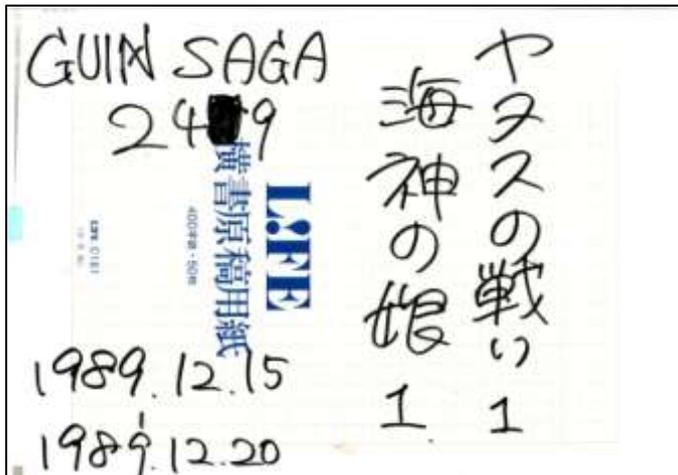


～白筆原稿・原画～



栗本薫（中島梓）

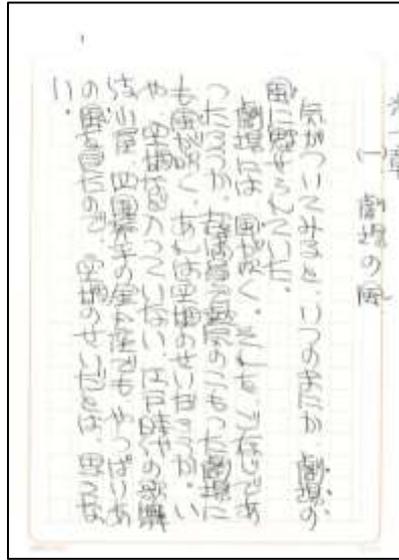
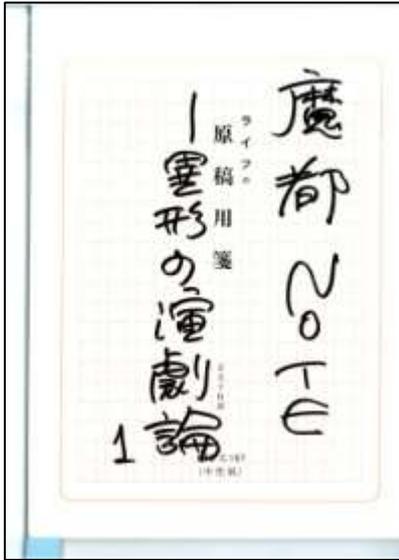
小説家、評論家。昭和 28 年(1953)～平成 21 年(2009)。東京都葛飾区青戸に生まれ育つ。昭和 51 年(1976)、評論「パロディの起源と進化」で商業誌デビュー。その翌々年、『ぼくらの時代』により第 24 回江戸川乱歩賞を受賞し、推理作家としてもデビュー。評論、SF、ファンタジー、ホラー、ミステリー、時代・伝奇小説と幅広い分野で、「栗本薫」「中島梓」という二つのペンネームを使い分けながら、膨大な著作群を執筆した。代表作は「グイン・サーガ」、「魔界水滸伝」、「伊集院大介」の各シリーズなど。



『ヤヌスの戦い』(グイン・サーガ 32)
栗本薫／著 早川書房 1990 年



『ヤヌスの戦い』(「グイン・サーガ」シリーズ) 自筆原稿



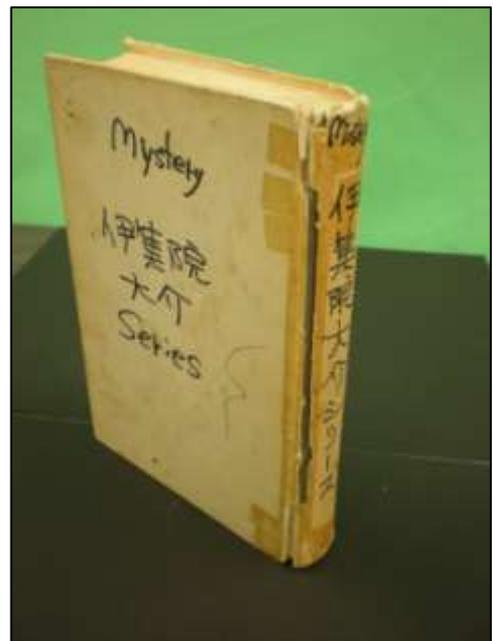
『魔都ノート—異形の演劇論—』自筆原稿

『魔都ノート—異形の演劇論—』

中島梓／著 講談社 1989年



「魔界水滸伝」執筆時に使用されたナンバリング
ナンバリング側面に「まかい」と記されている。

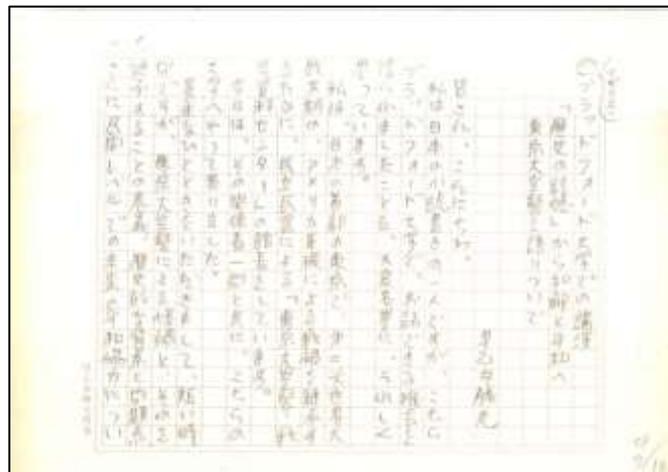


「伊集院大介シリーズ創作ノート」



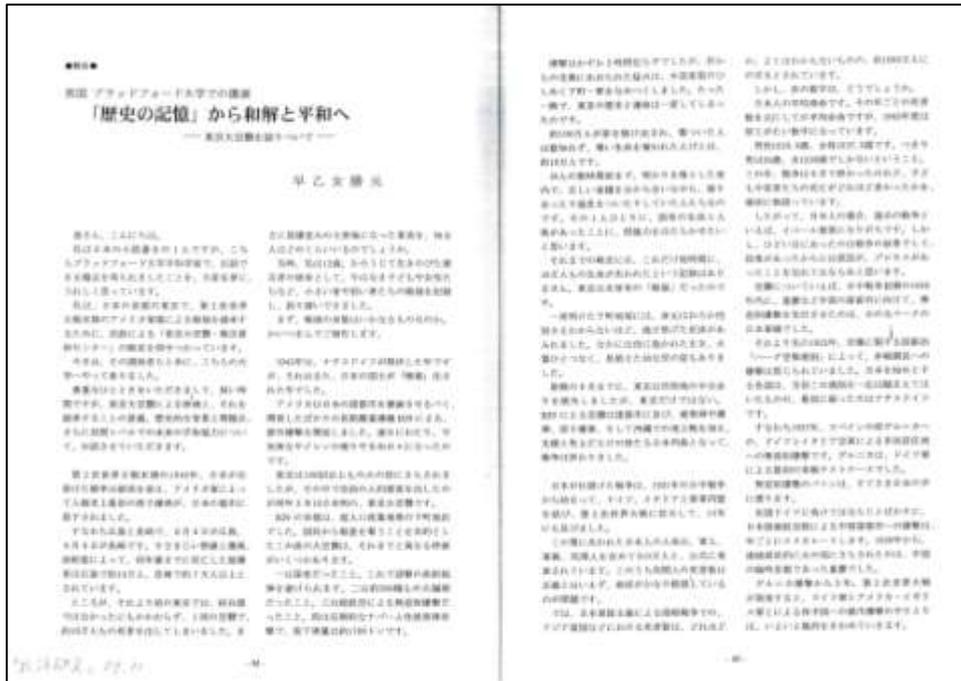
早乙女勝元

作家、児童文学作家。昭和 7 年（1932）東京生まれ。12 歳で東京大空襲を経験し、長きにわたり民間人の戦禍を語り継いできた。現在、「東京大空襲・戦災資料センター」館長。著書に『東京が燃えた日』、『生きることと学ぶこと』、『小説 東京大空襲』など多数。昭和 32 年（1957）～48 年（1973）まで葛飾区新宿町（現 高砂）に在住。

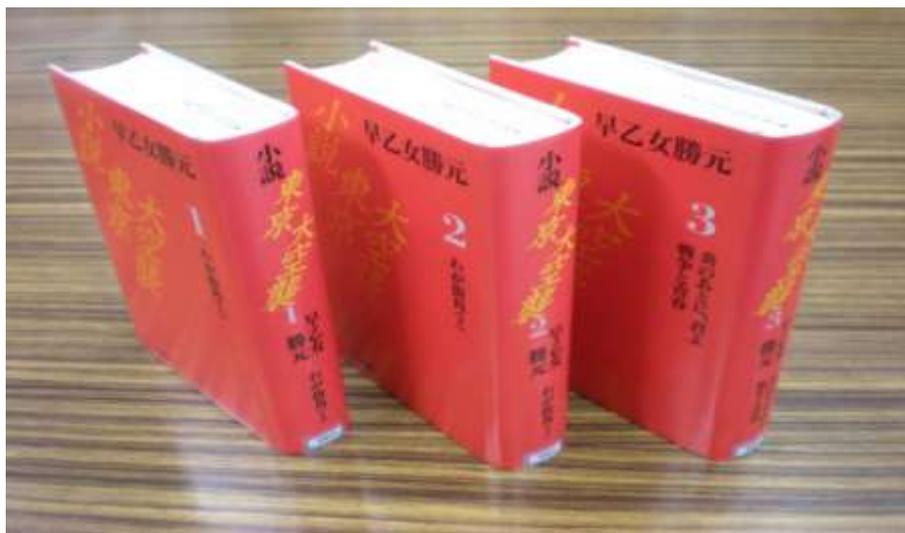


「英国ブラッドフォード大学での講演録『歴史の記憶』から和解と平和へ
—東京大空襲を語りついで」 自筆原稿
（『政経研究』、政治経済研究所『政経研究』編集委員会 93 号
2009 年 11 月 94～98 頁に掲載）

前頁は、2009年9月15日、イギリスのブラッドフォード大学平和学部で行われた講演録の自筆原稿です（B5版400字詰め原稿用紙で全16枚）。この講演は「早乙女勝元さんと歩く一平和と和解・英国周遊の旅」（同年9月11～13日）中のイベントとして開催されました。



『政経研究』の掲載頁

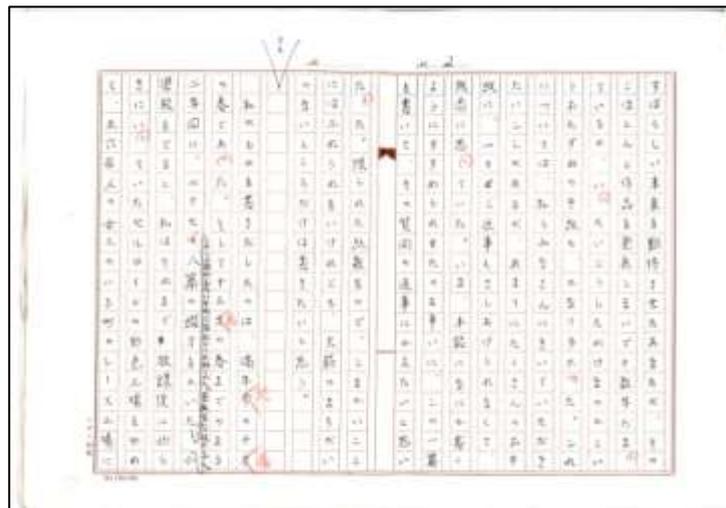
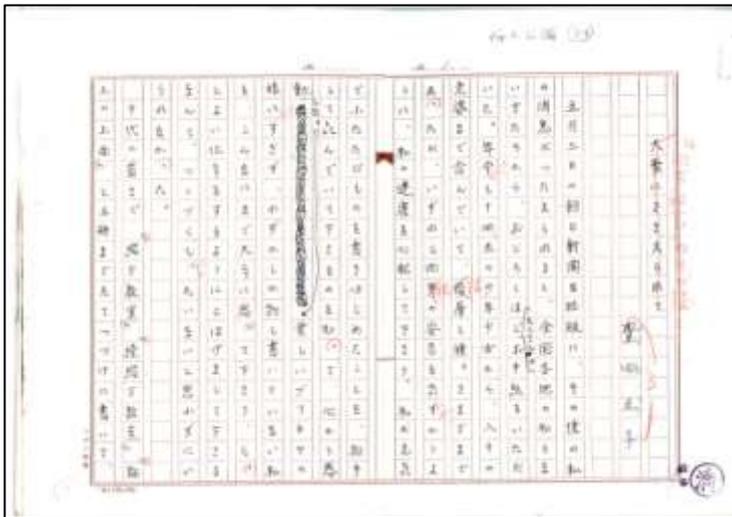


早乙女勝元『小説東京大空襲』第1～3巻、草の根出版会、2005年



豊田正子

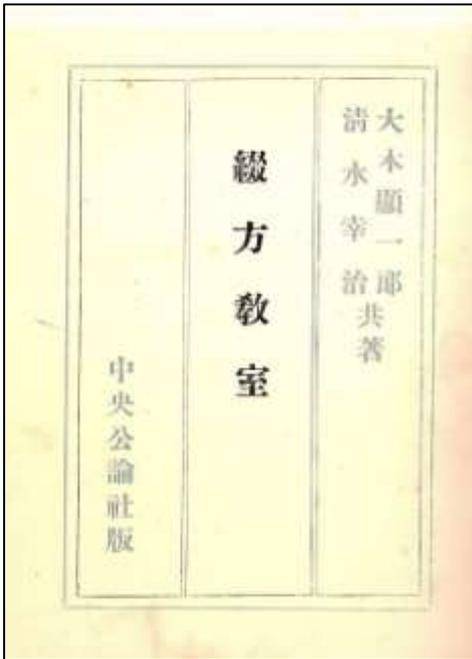
小説家、随筆家。大正 11 年（1922）～平成 22 年（2010）。東京の本所に生まれる。昭和 7 年（1932）葛飾区の本田小学校に在学中、教師の指導のもと日々のありのままの生活を作文に綴り、それがやがて『綴方教室』（1937）として刊行され、ベストセラーとなる。おもな著書に、『綴方教室』、『續綴方教室』、『粘土のお面』など。昭和 6～10 年頃まで南葛飾郡本田木根川町（現 四つ木）に在住。



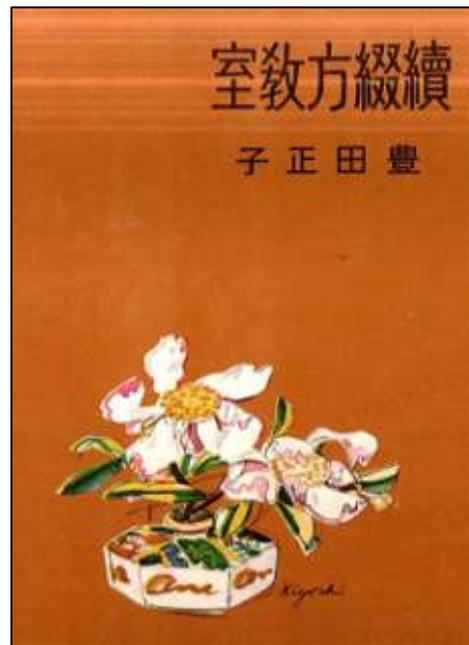
『綴方教室の私は死んだけれど』自筆原稿

（『婦人公論』44 卷 9 号、1959 年 7 月、128～133 頁に掲載）

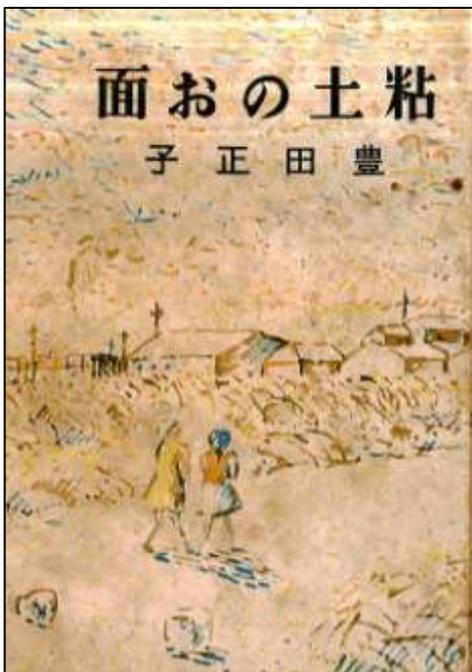
年若くしてベストセラー作家となった著者が、その後十数年の創作の
ブランク期間に辿った経緯や心境について率直に綴っています。



『綴方教室』 豊田正子／著
中央公論社 昭和 13 年



『綴方教室』 豊田正子／著
中央公論社 昭和 14 年

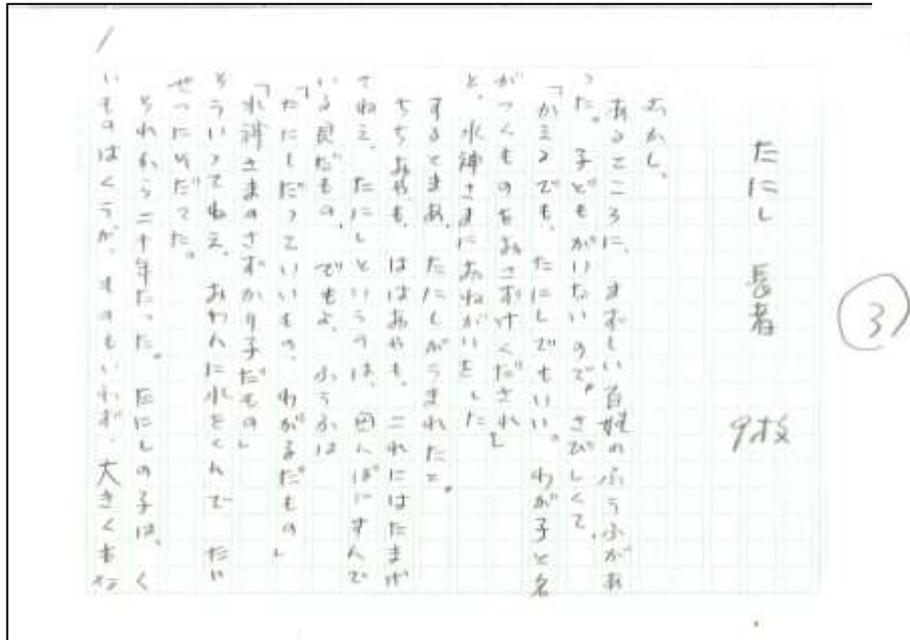


『粘土のお面』 豊田正子／著
中央公論社 昭和 16 年



松谷みよ子

戦後日本を代表する児童文学作家。大正 15 年（1926）東京神田に生まれる。『龍の子太郎』、「モモちゃん」シリーズ、「怪談レストラン」シリーズなど数多くの著作で知られる。昭和 30 年（1955）～42 年（1967）まで葛飾区金町に在住。



『たにし長者』自筆原稿

（『へっぶりよめさま あずきとぎのおばけ ほか』、むかしむかし4、
松谷みよ子／文 久住卓也／絵 講談社 1997年に掲載）



『へっぶりよめさま あずきとぎのおばけ ほか』
（むかしむかし4）
松谷みよ子／文 久住卓也／絵
講談社 1997年



『むかしむかし』5巻 まえがき 自筆原稿

『さるかに のっぺらぼう ほか』（むかしむかし5）

松谷みよ子文 南伸坊／絵 講談社 1997年に掲載



『むかしむかし』5巻 解説 自筆原稿

『さるかに のっぺらぼう ほか』、むかしむかし5、
松谷みよ子／文 南伸坊／絵 講談社 1997年に掲載



『さるかに のっぺらぼう ほか』

（むかしむかし5）

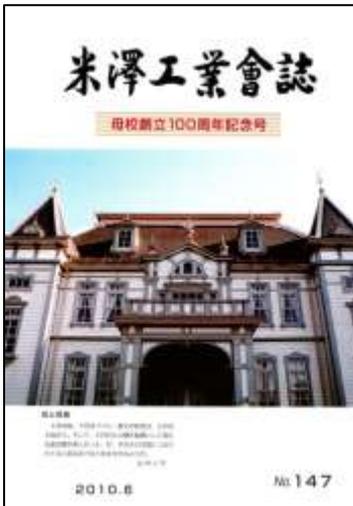
松谷みよ子／文 南伸坊／絵

講談社 1997年



吉本隆明

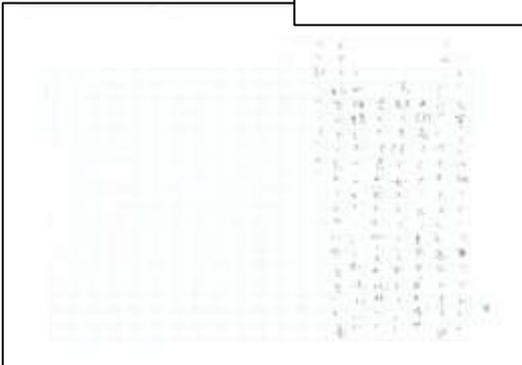
思想家、詩人、文芸評論家。思想、文芸批評など幅広い分野で戦後日本の言論界を長きに渡ってリード。大正 13 年 (1924) 東京の京橋区月島に生まれる。昭和 16 年 (1941) に現在のお花茶屋に一家で転入。東洋インキ製造株式会社に就職し、同社青戸工場で労働組合長・連合組合長を務めた時期もある。おもな著書に『言語にとって美とはなにか』、『共同幻想論』、『心的現象論』など。



『米沢工業會誌』No.147 (2010.6) 表紙

吉本氏は昭和 17 年 (1942) から二年半、米沢高等工業学校 (現 山形大学工学部) に在学していました。以下の原稿は、その母校の開校百周年にあたり、『米沢工業會誌』に掲載された寄稿文のもとになった自筆原稿です。よき師、よき友にめぐり会えた母校での思い出が綴られています。

なお、同誌は社団法人米沢工業会より刊行されている山形大学工学部同窓会の会報誌です



吉本隆明「母校生誕百周年万才」自筆原稿
『米沢工業會誌』No.147, 社団法人米沢工業会
2010年6月、7頁に掲載)



あきやまただし

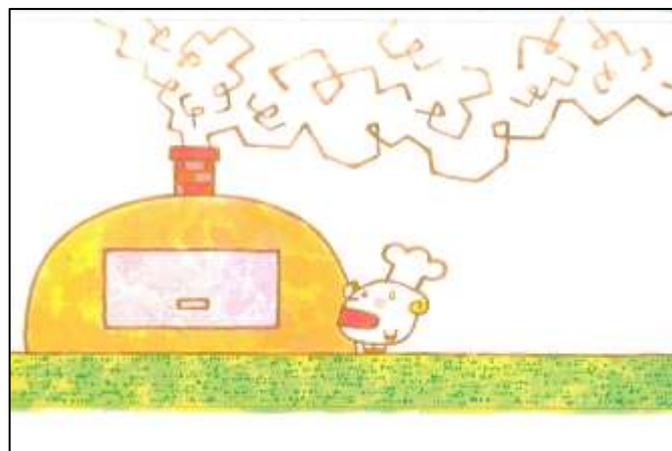
絵本作家。昭和 39 年（1964）東京生まれ。平成 7 年（1995）、『はやくねてよ』（岩崎書店刊）で日本絵本賞大賞を受賞。「まめうし」、「さかさのこもりくん」、「たまごにいちゃん」の各シリーズなど、絵本作品多数。みずから絵本を朗読する講演会「絵本ライブ」も全国各地で開催。現葛飾区在住。



《走れ! 走れ!》



『ひつじばん』より



『もっとひつじばん』より



葛飾区立図書館オリジナルのエコバッグ原画



《キングコンブ》

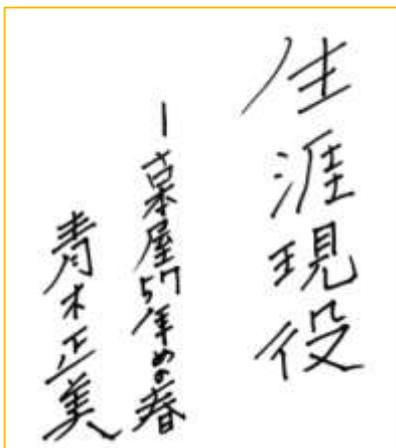
～色紙～

昭和 24 年（1949）1 月、現在の立石図書館の場所に区内で最初の図書館（葛飾図書館）が開設されました。約 3,000 冊の蔵書からスタートした図書館は、年々事業内容を広げ、様々なサービスを展開してきました。たとえば、昭和 26 年（1951）にはレコードコンサートを開催、昭和 43 年（1968）には『葛飾図書館報』創刊号を発行しています。このような図書館のあゆみを記す年表は、『かつしかの図書館』（年刊）に掲載されています。

たとえば、昭和 45 年（1970）の『葛飾図書館報』には「講演と映画の会」と称し、作家、早乙女勝元氏による講演「下町の生活と文学」と映画「男はつらいよ」の上映が紹介されています。

また、昭和 63 年（1988）の『かつしかの図書館』によると、区内の図書館 7 館がそれぞれ講演会を開催するという盛況ぶりが報告されています。図書館講演会は、現在も引き続き開催しています。ここに講演会の記念として頂戴した色紙の一部をご紹介します。

□平成 21 年（2009） 中央図書館開館記念講演会



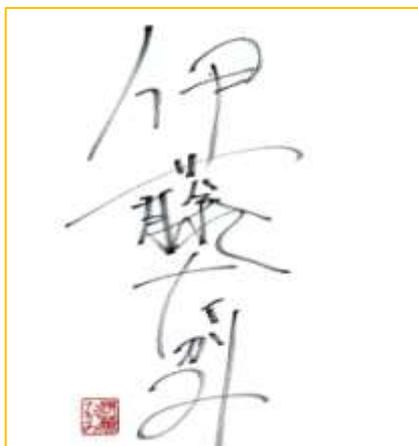
青木正美 2010. 2. 6

講演テーマ「下町の古本屋」



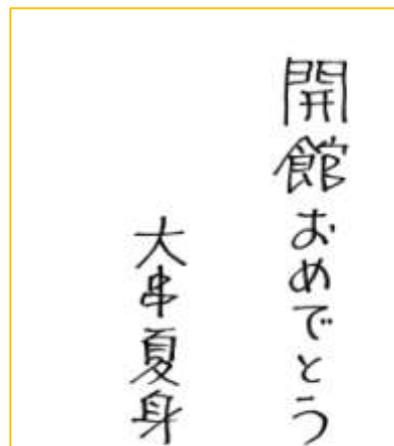
あきやまだだし 2009. 10. 25

講演テーマ「あきやまだし絵本ライブ」



伊藤たかみ 2009. 10. 24

講演テーマ



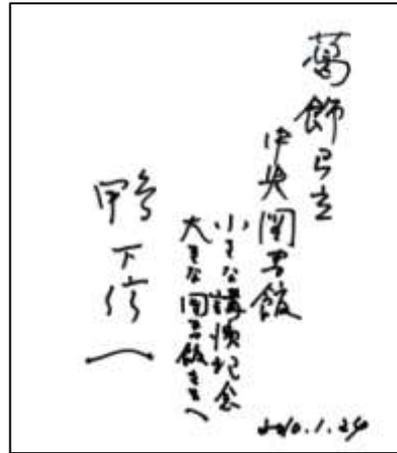
大串夏身 2009. 10. 25

講演テーマ「読書と図書館」



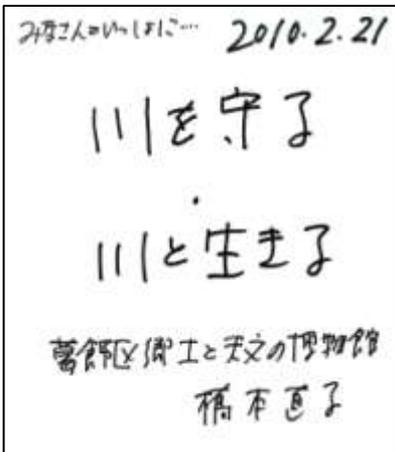
小川宏 2009. 10. 25

講演テーマ「人生設計—うつ病を体験—」



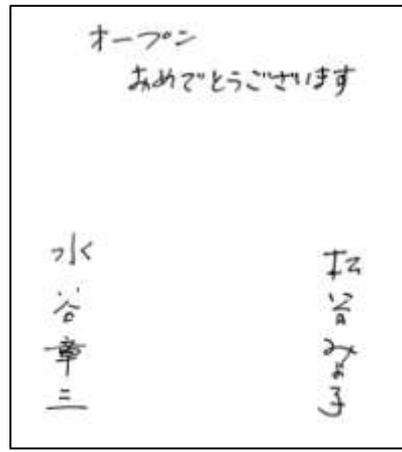
鴨下信一 2010. 1. 24

講演テーマ「森繁久弥さんとその時代」



橋本直子 2010. 2. 21

講演テーマ「かつしかの川と歴史を考える」



水谷章三・松谷みよこ 2009. 10. 18

講演テーマ

「金町から出発した私の作品 龍の子太郎」



山本一力 2009. 10. 31

講演テーマ「生き方雑記帖」

□昭和 63 (1988) 年講演会

池田雅之 1988.9.25 「国際摩擦時代の日本を考える」 上小松図書館

中山あい子 1988.10.9 「私の東京物語」 亀有図書館

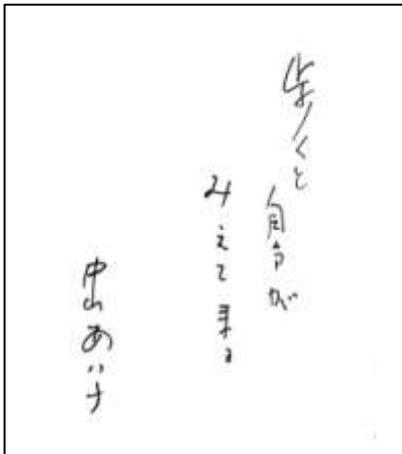
阿刀田高 1988.10.30 「書くこと 考えること」 お花茶屋図書館

種村直樹 1988.10.30 「気まぐれ列車の舞台裏」 葛飾図書館

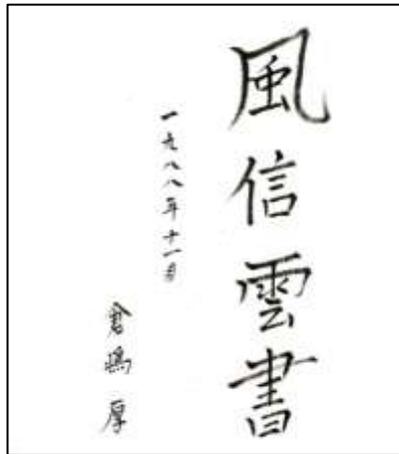
倉嶋厚 1988.11.13 「お天気よもやま話」 水元図書館

和田はつ子 1990.2.26 「現代における親と子」 鎌倉図書館

加太こうじ 1990.3.26 「下町と文化」 立石図書館



中山あい子



倉嶋厚



阿刀田高

□その他



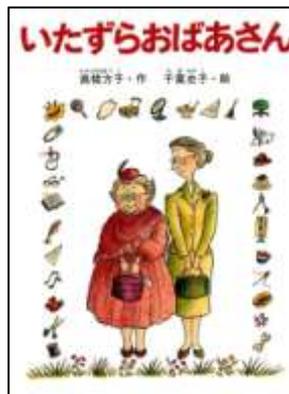
西内ミナミ

「ぐるんぱのようちえん」 福音館書店 1966年



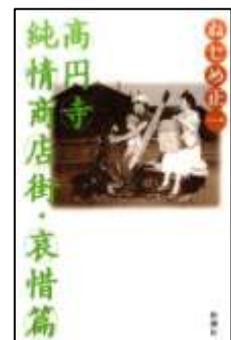
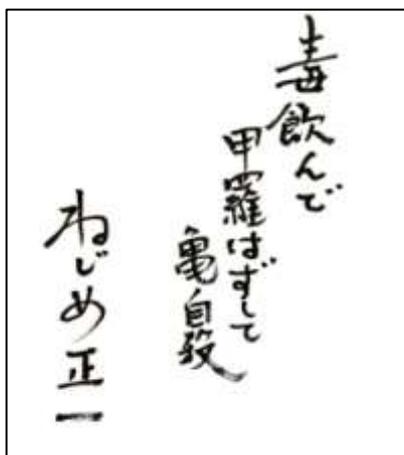
上橋菜穂子

「守り人シリーズ」 偕成社 1996年～



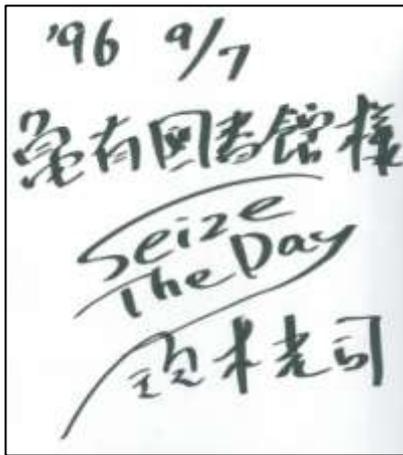
たかどのほりこ

「いたずらおばあさん」 フレーベル館 1995年



ねじめ正一

「高円寺純情商店街」 新潮社 1989年～



鈴木光司

「リング」(1995年改訂版)「らせん」(1996年改訂版) 角川書店



とよたかずひこ

「どんどこももんちゃん」 童心社 2001年



松井るり子

「絵本をとおって子どものなかへ」 童話館 2005年

～AV資料/オブジェ～

AV資料

『葛飾区郷土史講座』録音資料と『葛飾区郷土史講座総集録』、『葛飾区郷土史講座』



昭和44年(1969)から葛飾図書館で行われた葛飾の郷土史講座の記録「葛飾区郷土史講座記録と講義」を収録したものです。講義を録音したカセットテープは大変貴重な資料です。録音カセットテープは、当初62点ありましたが、資料の劣化に伴う破損により、14点のみ現存しています。2010年度、1周年記念の所蔵資料展示に伴い、長期保存のためCD化することになりました。

した。

CD化されたカセットテープに関連する資料として、第1回から第59回までの講座をまとめた『葛飾区郷土史講座総集録』、『葛飾区郷土史講座』が中央図書館に所蔵されております。

『葛飾区歌／葛飾音頭』 作詞／葛飾区撰 作曲／平井保喜（『葛飾区歌』）・古関裕而（『葛飾音頭』） 歌／伊藤久男 岡本敦郎 久保幸江 コロムビアミュージックエンタテイメント 1992年

昭和26年(1951)3月に告示された「葛飾区歌」のCDです。区歌は、葛飾区内の公式行事や学校行事でよく歌われます。カップリング曲として、区内の盆踊り会場で良く耳にする「葛飾音頭」も収録されています。



フィギュア

キューピー人形

葛飾区内の町工場では戦前から、おもちゃの生産が盛んでした。中でも有名なのが、現在でもオビツ製作所で制作されている大小様々な大きさのキューピー人形で、人形職人さんたちが作っています。葛飾区立図書館では、平成 22 年(2010)10 月 17 日の中央図書館開館一周年に際して、葛飾区の伝統産業であるキューピー人形を郷土資料として受け入れることを決定し、オビツ製作所にキューピー人形の寄贈をしていただきました。



オビツ・ボディ®

オビツ製作所では、「ネジなど余計な部分が見えない」「自立できる」「関節を自由に曲げられる」「関節を曲げた状態のまま保持できる」「ユーザーの手で各パーツの換装が可能」という特徴を持ったオビツ・ボディ®と呼ばれる球体関節を用いたフィギュアを開発・制作しています。購入者の方々のアイデア・要望を積極的に取り入れ、これまでの技術の蓄積からスラッシュ整形という独自の開発技術を用い、生産し、いまやフィギュアドール界の世界スタンダードになっています。

葛飾区立図書館では、「オビツ・ボディ®27cm 男性リアルボディクリア」を寄贈していただきました。



『オビツボディ 総合カタログ』ver.5.0



郵便局オリジナルフレーム切手

郵便局オリジナルフレーム切手「葛飾・足立散歩路 ― 切り絵で巡る葛飾区・足立区」は、平成19年（2007）5月21日に日本郵政公社東京支社より発行され、葛飾区・足立区内郵便局限定で販売されました。切り絵で巡る葛飾区・足立区という趣向で、両区の10か所の風景・名所が、緒方久美子氏による切り絵で描かれています。葛飾の切手には、「しばられ地蔵」、「堀切菖蒲園」、「矢切の渡し」、「柴又帝釈天」、「かつしかハーブ橋」が題材に用いられています。

「葛飾の花菖蒲 ― 現代花と古花の菖蒲絵巻」も、同日に同社より発行され、葛飾区内郵便局限定で販売されました。10枚の切手には、葛飾の区花である花菖蒲の「十二一重」「江戸紫」など10種が図柄に用いられ、また上部の写真部分には、堀切菖蒲園と水元公園の風景、二代歌川広重と三代歌川豊国が描いた堀切花菖蒲の浮世絵がそれぞれあしらわれています。2010年4月19日には、フレーム切手「葛飾の花菖蒲Ⅰ・Ⅱ」も販売されています。



「葛飾・足立散歩路」



「葛飾の花菖蒲」

～協力者・協力機関一覧～
(敬称略)

あきやまただし
秋本治
今岡清
小宮康孝
早乙女勝元
佐野眞一
橋本直子
松谷みよ子
吉本隆明

株式会社オビツ製作所
葛飾区郷土と天文の博物館
京成電鉄株式会社
株式会社タカラトミー

葛飾区立図書館所蔵
葛飾コレクション図録
葛飾区立中央図書館開館一周年記念

2011年3月 刊行

企画・編集・発行
葛飾区立中央図書館『葛飾コレクション図録』制作グループ
〒125-0042
東京都葛飾区金町 6-2-1
ヴィナシス金町ブライトコート 3階
TEL03-3607-9201

印刷・製本：株式会社日本ブッカー

© 葛飾区立中央図書館 2011

本図録の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。